
春に降る雪 ～杉田友宏の章～

クレーマ・パスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春に降る雪 ～杉田友宏の章～

【Nコード】

N5722L

【作者名】

クレーマ・パスタ

【あらすじ】

茶髪にピアス。見た目はちゃらいサラリーマンの杉田友宏^{すぎたともひろ}。彼はある特殊な能力を持っていた。その明るい笑顔の下で考えているものとは。やや暗めで、切ないです。ムーンライトノベルズ「春に降る雪」の番外編ですが、読んだ事のない方でもわかるようになっていきます。ただし、マークは本編を読まないという意味が通じません。できれば本編、霜月の後に読んでいただくとわかりやすいと思います。

01・悪夢（前書き）

こちらまで読んでいただき、ありがとうございます！
残念ながら橘雪成の出番はありません。

春人の出番も少ないです。ただし高校時代が出てきます。
一応ボーイズラブですが、女性との絡みがほとんどです。
以上をふまえて御覧くださいませ。

> (| |) < ペこり

01・悪夢

俺は薄暗い中を、全速力で走っていた。

何かに追いかけられてる。俺は恐くて、焦って後ろを見るけど、ぜんぜんそれは見えない。俺は、見えないものに追いかけていた。

「はぁ……はぁ……」

息が切れる。

切れたことなんか無いのに。

汗が目に入る。

汗かいたことなんか無いのに。

追いかけて、立ち止まれない。

俺は全速力なのに、ちっとも前に進んでいない。

ここは墓場だ。

日本の墓石もあれば、外国のものもある。見渡す限りに広い墓地。

夢だ。

これは夢だ。

そんなのわかってる。

わかってるのに、目が覚めない。

「ううっ……！」

恐くて涙が溢れた。

追いつかれる。その何かに。

足首を誰かに掴まれて、世界がひっくり返る。

コケて、立ち上がるうとして泥に手をつくると、そこがズブッと沈んだ。

俺は慌てて空を見た。

真っ暗な空。

何も見えない。

ああ、来る。

……やめてくれ！

俺がそう思った瞬間。

泥の中から、無数の手が……

！

「ひっ……！！」

叫び声を上げるヒマなんかない。

そのまま地面に引きずり込まれる。

しかも白骨の冷たい手で。

助けて！

……たす、けて……！神様……！！

来てくれる。

必ず助けに来てくれる。

俺の……神様っ……！！

は、早く……！！

俺は地面に引きずり込まれながら、手を空へ伸ばした。

かすんでいく目の前に、誰かが現れる。

「あ……っ！」

真っ暗な空から、ぼんやりとした光。

その中から、誰かが俺に手を差し伸べる。

ああ、神様！

俺の神様……！！

やっぱり来てくれたんだね……！！

俺は、その手を死に物狂いで掴もうとした。

その手に触れそうになった瞬間。

ピ。ピ。ピッ……ピ。ピ。ピッ……ピ。ピ。ピッ……

突然響いた電子音に、俺は愕然として目を見開いた。

目の前に飛び込んでくるのは、見慣れた天井。

「っ……」

俺の顎が、ガクガクと震えている。

顎だけじゃない。脚も……肩も。

あまりの恐怖で、涙が出ていた。
俺はベッドの中で、体を丸めた。
震える膝を抱えて、ぐっと歯を食いしばる。

夢。

やっぱり、夢だ。

久しぶりに見た。あの悪夢。

俺はまだ震えている体を、無理やりベッドから起こした。
バクバク鳴っている心臓を押さえて、身を縮めて固まった。
俺はハダカだった。

周りには誰もいない。

ケバい内装に、でっかいダブルベッド。

ああ、そうか……昨夜はナミちゃんと……

でも女の子の姿は、どこにもない。

やっぱり、帰っちゃったのか……

女の子には着替えが必要だ。昨日と同じ服で出社すると、うわさになるから。

念のため、もう一度試しておいて良かった。

ナミちゃんはもう……使えないな……

俺は地下鉄の駅のホームで、ぼうつと電車を待っていた。

ああ……最悪。

またあの悪夢を見ちゃうなんて。

最近、あんまり見なくなってたのに……

昔から見る、お馴染みの悪夢だ。

俺は追いかけて、掴まって地面に引きずり込まれる。

それでもって、いつも助けてくれそうになる。あの光と手。

俺はその手の事を、神様と呼んでいた。

その手の主は、まだ見た事がない。
でもきつと、ハルちゃんだ。

そうだ。そうに違いない。
だってハルちゃんは、俺の神様だから。

すると、ホームのアナウンスが聞こえた。快速電車が通るみたいだ。
この駅には停まらない。俺は通勤カバンを持ち直して、深く息を吐いた。

集中の準備だ。

…… よおし。今朝もやるぞ。

電車がホームに入ってくる。

俺はすつと目を細めた。

大きな音と地響きを立てて、電車が駆け抜けていく。

俺は風と一緒に去った大きな乗り物を、ホームから見送った。
マリちゃん、さっちゃん、みえちゃん、山ちゃんが乗ってた。

…… けーちゃんは遅刻かな。

満員電車の中で、俺は同僚の顔をはつきりと見ていた。

ただ、さっちゃんは、今日も痴漢に遭っているみたいだ。

俺は、ため息をついた。

でも…… そういうプレイなんだね。真後ろにいる男の人と、腕組んで歩いてるの、見たことあるよ。誤解されちゃうから程々にしたほうがいいと思うけどなあ。

まあ。

どうでもいいけどね。

どうでもいいのは、それだけじゃない。

俺には、すべてがどうでもいい。

だって現実なんて、テレビの中で起こることと同じだし。

夢の中の方が、よっぽどリアルだ。

すぐに電車が来たので、俺は満員電車に乗り込んだ。
ぎゅぎゅぎゅに押される車内で、俺は足を踏まれたけど。
別にどうでもいい。
実はあんまり、痛みを感じないんだ。
だって現実じゃないから。

会社に着くと、もうほとんどの社員がビルの中に入っているみたいだった。歩いている人は少ない。俺はエントランスホールの受付嬢みきちちゃんとみゆきちゃんに笑顔で手を振った。制服姿の美女たちが、俺を見て同時に微笑んだ。
今朝はあんまり気分がよくないので、話しかけずにエレベーターに乗り込んだ。
いつもなら一回くらい笑わせてから行くけど。

エレベーターが着いた先の営業課のドアを開けると、いろんな人の声が聞こえた。

女の人たちの、ウワサ話。

ねえねえ、あのウワサ知ってる？

なに？今野さんでしょ？

そうそう。不倫してるらしいよ〜

えっ！？相手は誰よ！？

それがわからないのよう……あんた何か知ってる？

あたし何も知らないの。ほんとよ？

怪しい。

男の人のヒソヒソ声も。

明日の飲み会、どこにする？

は？予約取ってないのかよ！？もう明日だぞ？

もうすぐ忘年会シーズンに入るからな。急がないと。

急がないとって……明日なんだって。お前やる気あんのかよ？やる気も何も、俺が幹事って、昨日聞いたんだぜ！？

は？マジで？

別の部屋の個室では、上司の人たちが何か喋っていた。かなり小さな声で、周りに聞かれないように気を使っているようだ。

まずいぞ。まずいことになった。

大丈夫ですよ。監査といっても簡易的なものです。バレやしませんよ。

本当かね？もしこの使い込みがバレたら……

安心してください。まだ数十万じゃないですか。その程度、何とかありますよ。

アテはあるのかね？すぐになんとかしないと……

大丈夫。ちゃんとアテはあります。お任せ下さい。

そのすべてが、混ざり合って聞こえた。

俺はうるさくなって、耳を閉じた。

どうでもいいよ。

そんなコト。

笑顔で同僚に挨拶をして、自分の席に着くと、急に中年の課長から呼ばれた。でも聞く気がなかったので、なんて呼ばれたのかはわからなかった。ただ顔を上げてこっちを見て口を開いたので、呼ばれたと思っただけだ。でも勘違いじゃない。

俺は慌てて立ち上がって、カバンとコートを自分の机の傍に置いた。課長のデスクの前に行くと、課長はしかめっ面で言った。

「杉田、今日も二分遅刻だな。」

俺は笑顔で頷いた。

「あ、はい。電車がこの時間なんで。」

課長は、眉間にシワを寄せて言った。

「もう一本前の電車に乗れと言っただろう!」

「あはは……すみません。」

「あはは、じゃないっ!何度言ったらわかるんだ、杉田!入社して何年経つ!」

俺は笑顔を崩さずに、ちよつと考えた。

「えつと……よくわかりません。」

「……もう三年も経つんだぞ。そろそろコピーくらい取れるようになったらどうなんだ!営業成績だけでやっていけると思うなよ!事務の一つくらい覚えろ!まったく、そんな頭して、チャラチャラしてるから遅刻なんかするんだ!もう学生じゃないんだぞ!」

俺は笑顔で自分の頭を指差した。

「あ、これはお洒落ですよ。似合ってますでしょ?」

課長は、ドンとデスクを叩いた。

「そういう問題じゃないっ!得意先も、お前を変な目で見てるのがわからんのか!」

俺は、ぱつと目を輝かせて言った。

「あ、確かに。俺の宴会芸見て爆笑してましたよね!おとといだったかなあ……」

俺がとぼけて言うと、課長は、ぐ……と黙った。

そしてコホンと咳払いをする。荒げていた声を、急に落として言った。

「ま……確かにお前のおかげで取引はうまくいった。先方がお前を気に入ってくれてな。お前が担当なら、構わんと言っただ。」

「えっ、マジですか!?!」

すると課長は、また怒り出した。ドンとデスクを叩く。

「なんだその言葉遣いは!本当ですかと言え!」

俺は後頭部をかいた。

「あはは……すみません。」

課長はため息をついた。

「まったく……そういうわけで、今日からお前の担当が増えるから

な。」

「はい。」

「短く！」

「はいっ！」

俺はおどけて、さっと敬礼した。

課長はしかめっ面で言う。

「……行ってよし。」

「はいっ！」

俺は軽い足取りで自分の席に戻った。

すると隣の席の山ちゃんが、俺にこっさり耳打ちしてくる。

「聞いたぜ、お前。あの得意先をまとめたんだってな。やるじゃねえか。」

「ああ……うん。そうみたい。」

山ちゃんは、ため息と一緒に言う。

「伝票もまともに回せねえくせに、接待に持ち込むと100%成功するなあ。今度教えるよ。何を見せたんだ？」

俺は笑いながら言った。

「んふふ……企業秘密ってやつ？でも伝票は最近できるようになったんだよ？」

「おせえよ。」

「あはは……」

俺が笑うと、山ちゃんは笑って自分のデスクに向き直った。

俺は笑顔の下で、疑問に思っていた。

どうして、みんな……

どうでもいいコトを言うのだろう。

二分遅刻とか。取引がうまくいったとか。

事務ができないとか。宴会芸とか。

俺には、そのすべてがどうでもいい。

数時間後。

俺は書類を持って、社内をうろついていた。

この書類は、コピーしたいやつだ。でもこのコピー機はどれもこれもが複合機みたいで、スイッチがいっぱいについていてよくわからない。

いつもは、女友達のよしちゃんに頼んでいた。

でも、よしちゃんは自分のデスクにいなかった。だから俺は、その書類を持ったままウロウロしていた。

……みつからないなあ。

トイレかなあ。ロッカー室とか？

自動販売機の前に来たけど、小休憩用の長椅子が廊下の死角においてあるだけで、誰もいない。俺はポケットの中から小銭を出すと、缶コーヒーのボタンを押した。

コーヒーなんてどれでもいいから、よくハルちゃんが飲んでいる物にした。

椅子に座って飲んでいると……俺の背後から、こつそり誰かが近付いてくる。

俺は振り返らなかった。

だつて振り返らなくなつて、よく見える。

この世界って、現実じゃない。

どこか色褪せてて変だ。

ただ立体で、薄い色がついてるだけ。

薄っぺらくて、空っぽの世界。

まるでテレビの中と同じ。

ドラマや映画を見ているみたいだ。

カメラが主人公を映すように。

俺は、俺を見ている。
だからよく見える。

周りの景色も。俺の真後ろも。

俺の背後から、そうつと……制服姿のよしちゃんが近付いてくる。
あ……ピンクの口紅。かわいいね。

よしちゃんは俺のすぐ背後まで来ると、ぱつと俺の目を塞いだ。

「だーれだ！」

「わっ！」

俺は驚いた振りをした。でも半分ホントに驚いた。まさかそんなことをするとは思わなかったから。まるで小学生みたいだ。

「えーつと、えと、よしちゃん!？」

「当たり前い〜！」

俺が振り返ると、よしちゃんは笑った。

「なんでわかつたの？」

「えつと……声かな。」

「そっか！」

よしちゃんは俺の隣に座った。俺が持っている書類を見て、首をか
しげた。

「あれ？杉田君。どうして書類持ってくつろいでるの？さては。サ
ボリだな？」

「あつは、バレた？実はこれ、コピーしたくてさ。よしちゃんを探
してたんだ。」

よしちゃんは、呆れた顔になった。

「コピーくらい、できるつて。ちゃんとやり方教えたじゃない。で
きないつて思い込んでるだけよ。」

「うんでも……この間、コピーしようとしたら、ファックスになっ
ちゃってさ。どっかに送っちゃったんだよね……しかも何回も。」

よしちゃんは目を丸くした。

「はあ!？」

俺は首をかしげた。

「社内文書だったのに、どこへ送っちゃったんだろ。」

「こつちが聞きたいわよ……まったく。しょうがないわねえ、貸して。」

「あ、ありがとー！頼りになります。」

俺はコーヒーを持っていない手で拝んだ。

「まったく……」

よしちゃんは少しだけ目を伏せた。

「あたしがいなくなったら、どうすんのよ。」

「……」

よしちゃんは、俺の同僚と付き合っている。

でも最近、別れたくなくなってきたらしい。

別れちゃうと、仕事がやりづらくなるから、別れて会社辞めるとか考えているみたいだ。

でも、それはウワサじゃなくて、ちゃんと本人から恋愛相談を受けているから、きっと本当のことだと思う。

俺はコーヒーを一口飲んで言った。

「まだ、悩んでるの？」

「う、うん……」

「そっか。」

相談を受けた時に、俺はもう考えを言った。

彼氏と別れて、会社にいなさい。

別れても仕事とは関係ないよ。

一度言った以上、二度と言わない。

それは押し付けになってしまっから。

本人が判断しないと、どっちに決めても意味がないから。

ま、どうでもいいんだけどね。

だってドラマの中だし。

他人事だし。

俺は気を取り直して言った。

「その口紅、かわいいね。秋の新色？」

よしちゃんは、にっこり笑った。

「あ、さすがジゴロの杉田君。わかった？」

俺は呆れた。

「ジゴロって……最近聞かないよ？」

「あはは、そうねえ。じゃあプレイボーイ？彼女作らないけど遊んでるって有名よあ？」

「そうなんだよねえ、困っちゃう。」

「ほんと嬉しくせにい。」

「バレたあ!？」

俺とよしちゃんは笑った。よしちゃんは笑いながら言った。

「じゃあさ、この匂いにも気付いた？」

「え……」

俺は笑顔の下で、内心ぎくりとした。よしちゃんは得意気に言った。

「香水も変えたんだ。」

「へ、へえ……なんか違うと思った。なんていう香り？」

「フローラル系よ。」

「ふうん……けっこう好きだなー。」

「うふふ、そうだと思った。」

……ウソついて、ごめんね。

ほんと匂いって、よくわからないんだ。

テレビの中のおいしそうな料理も、実際に匂いがするわけじゃない。それと同じ。

実は味も、よくわからないんだ。カレーは好きだけど。

ハルちゃんと食べるときは、和食が好きな振りをする。

ハルちゃんは和食が好きだから。

よしちゃんは、笑いながら立ち上がった。

「じゃ、あたしコピー取ってくるね。」

俺は去ろうとする、よしちゃんの腕を掴んだ。

「あのさ……また遊んでくれる？二人つきりですか……」
よしちゃんは笑っていたのに、急に顔を引き締めた。

「……それ、もう言わないでくれる？」

「後悔してるの？スリルあったでしょう？」

よしちゃんは、冷たい目で俺を見た。

「……大丈夫。くせになつたりしないわ。」

俺は手を離して、笑った。

「そ。いつでも待ってるよ。」

「……」

よしちゃんは何も言わずに歩いて行った。

俺はよしちゃんの後ろ姿に、心の中で言っただけあげた。

……心配しなくても、誰もいないよ。

よしちゃんとは、かなり前に一度だけ関係を持った。

でも、それ以来はない。

恋愛相談を受ける前だから、卑怯じゃないよね。

って、自分に言い聞かせた。

お昼休みになって、俺は屋上へあがった。

今日はよく晴れていて気持ちがいい。空気が乾燥している。屋上にはボイラーや空調を管理する銀色の箱がいくつか置いてあった。

それを囲むようにベンチが置いてあって、社員たちがそこでお弁当を広げていた。

俺はそれを見て、うーんと背伸びをした……けど。

そのまま凍りついた。

銀色の巨大なボイラー。そこにチラチラと光が踊っている。

隣のビルは、ここよりも背が高い。いくつもの光が、そのビルの窓

に反射していた。

俺は両手を下ろして、さり気なく隣のビルの死角に入った。そこにあつたベンチに座る。隣のビルからは見えない位置だ。俺はそのまま振り返らなかつた。

あの光。

ガラスの反射じゃない。間違いなく望遠レンズだ。

……なに？狙撃？

誰を狙っているんだろう……やっぱ俺かな……？

すると金属性のドアが開いて、ナナミちゃんが出てきた。

俺は軽く手を振ってナナミちゃんを呼んだ。

ナナミちゃんの手には赤色の包みがある。しかも二つ。一つは俺のお弁当だ。

ナナミちゃんはいつも俺のお弁当を作ってくれている。

ナナミちゃんは俺のすぐ近くに来ると、微妙な表情で赤い包みを渡してくれた。

「はい……お弁当。」

「ああ、ありがとぅ！いつもごめんねえ。」

「うん……いいの。私が勝手にやってることだから……」

あれ？

今日のナナミちゃんは変だな。

ちよつと元気がない。

いつもニコニコしているのに。

……もしかして。この狙撃手とつながってるのか？

……まさかね。

俺は右の耳を気にしながら言った。

「あのさ、鏡持ってる？ちよつとピアスが取れそうで……」

「ああ、あるわよ。」

ナナミちゃんは制服のポケットから、手の平くらいのコンパクトを

貸してくれた。

俺はそれを開いて、ピアスをいじりながら、素早く隣のビルを見た。でもすぐにコンパクトを閉じて、ナナミちゃんに返す。

「ありがとう、もう大丈夫みたいだ。」

「そ、そう……」

「お弁当食べよ。」

「うん……」

ナナミちゃんは曖昧に頷いた。

……なんだ。

狙撃かと思ったら、双眼鏡だった。

もちろん鏡でダイレクトに隣のビルを見たわけじゃない。そんなことしたら目が合っちゃう。ボイラーの機械に反射している光を見ただけ。

そこには、一人の男の姿が歪んで映っていた。

隣のビルの、はめ込みのガラス窓の奥に、スーツ姿の男が立っている。

しかも。

要刑事……じゃん。

02・お弁当

なんで……？

なんで俺を見てるの？

ハルちゃんの身辺調査の一環？

それとも……

「わ、おいしそうだね！どれもこれもキレイ！」

タコさんウインナーに、玉子焼き。から揚げに、きんぴらごぼう。ポテトサラダ。

俺はお弁当を膝に乗せて、両手を合わせた。

「いただきます！」

要刑事がここで待つてた以上、多分ここには、盗聴器が仕掛けられている。

もしかしたら監視カメラも。

なんで俺がここに来ること知ってるんだろう。

聞き込みでもやったのかな？

まさか、それはないよね。

そんな派手なこと、するはずがない。

俺は一口で玉子焼きを平らげた。

……ん？

なんか違和感。この玉子焼き。

ま、いつか。

「おいしいね！」

俺はそう言つて、そのまま食べ続けた。

すぐ隣に座っているナナミちゃんを、俺は見なかった。

でも、神妙な表情をしているのがよくわかった。

「あの……杉田君？」

「なに？」

「……無理しなくていいのよ？」

「ん？なにが？」

ナナミちゃんは足元を見た。ナナミちゃんの膝には本人の分のお弁当が置いてある。

ただし手をつけていない。

「そ、その……美味しくないのでしょ？それ……」

俺は思いつきり頬張って答えた。

「へ？なんで？おいしいお？」

俺はモグモグ食べ続けていた。

「そのお弁当……思いつきり酢が入ってるんだけど……」

俺は一瞬だけ箸を止めたけど。

そのままモグモグ食べ続けた。

「え、なんで？ああ、そっか。わかった！」

「え？」

俺はにっこり笑った。

「それって俺のためでしょ？あれだよ。お酢って身体にいいって言うもんね。」

「……そ、そうじゃなくて……」

「ん？」

俺はナナミちゃんを見た。でも俺は、そのまま食べ続けたまま。

ナナミちゃんは泣きそうな顔をしていた。

俺は頬張ったまま聞く。

「じゃあ、なんで？」

ナナミちゃんは泣きそうな顔で口ごもった。

「そ、それは、その……た、食べなくて、いいわよ……マズいんだから！」

「マズくないお？」

俺は口いっぱい頬張って微笑んだ。

「ナナミちゃんの作ってくれたお弁当だもん、美味しいよ。残した
らもつたないし。全部食べるよ。」

ナナミちゃんは、目にいつぱい涙をためていた。

「なんで？なんで全部食べるのよ！？酸っぱくないの！？」

「んーちよつと酸っぱいけど、美味しいよ？」

「……」

ナナミちゃんは涙を手で拭いてうつむいた。

俺はその間も箸を止めることはなかった。

「あーおいしかったあー！ごちそうさま！」

俺は箸を置いて、手を合わせた。

お弁当をしまっている、ナナミちゃんが呆れた声で言った。

「……ほんとに全部食べるとは思わなかったわ……」

「あれ？ナナミちゃん食べないの？もしかして自分の分にも入れち
やった？」

「……いや……そうじゃなくて……」

「ん？」

「食欲、なくなったのよ……」

俺がきよとんとしていると、ナナミちゃんは食べずにお弁当をしま
った。

そして、うつむいたまま言った。

「ねえトモ君。」

「ん？」

「昨夜、どこに泊まったの？」

「……どこって……」

俺はとぼけたけど。

それで納得した。

わざとマズく作ったお弁当で、俺の反応を見ていたのか。

「……いつものホテルだよ？総務課のナミちゃんと。」

「！」

ナナミちゃんは驚いた表情で俺を見た。でもすぐに目を伏せた。

「……………そう。隠さないのね。」

俺はにっこり笑った。

「なんで隠す必要があるの？」

ナナミちゃんは焦ったように言った。

「だ、だって……………！」

「あ！そういうえば、ナミちゃんとナナミちゃんて、名前が似てるよね！」

「……………でも関係ないわ。同一人物じゃないのよ。」

「うん、知ってるよ？」

「そう……………見分けがつかないのかと思ったわ。」

「あはは。まさかあ……………」

ナナミちゃんはうつむいていたけど、顔を上げて俺を見た。

「でも、私のこと好きって言ったわよね？」

「え、好きだよ……………でも愛してるわけじゃない。」

「……………！」

俺は笑って首をかしげた。

「って、前に言ったはずだけど？」

ナナミちゃんは、みるみる泣きそうになった。

「ひ、ひどい……………」

「どうして？その時はナナミちゃん、それでもいいって言ったよね？」

ナナミちゃんは涙で喉を詰まらせて言った。

「私……………も、もういやなの。別れて欲しいの。」

「うん、いいよ。別に構わないけど。ていうか、俺たちって元々付き合ってたっけ？」

俺がそう言った瞬間。

パァァンッ！

「ぶー！」

急に左頬が熱くなった。ナナミちゃんの平手打ちだ。

「い、いつ……！」

俺はびつくりして、左の頬を押さえた。

ナナミちゃんは低く言った。

「……さよなら。」

そして赤い包みを二つ持つて、屋上を早足で出て行った。

俺はまだ、頬つぺたを押さえていた。

「いつ……」

痛くないけど、びつくりした。

「……女の子って、たまに痛いよね……」

俺は独り言のように呟いた。

それは盗聴器のためでもあるし、近くにいた人のためでもあった。

その、近くにいた人は、そのまま立ち去るのかと思っていたら、意

外にもボイラーの角からすつと出てきた。

「……あんた。バカじゃないの？」

俺はその人の足元を見た。白い制服の靴だ。

そのままスラツとした脚に目を奪われて……どんどん視線が上げていく。

制服のスカートに、大きな胸……それを覆うほどの長い髪。

赤い口紅がよく似合っている。

「……今野さん。」

秘書課。今野咲さん。

歳はわからないけど、未婚で社内一の美人だと有名だ。

キツネ顔の美人で……ちよっとハルちゃんに似ている。きつとハル

ちゃんが女の子になったらこんな感じ。

でも、ひどいウワサがたくさんある人だ。口が悪くて性格ブスで、

不倫してるとか。

やっぱり目立つ人って、いろんなウワサをたてられちゃう運命なんだ。

ハルちゃんもそうだけど。

今野さんは見下したような目で俺を見て言った。

「社内一のプレイボーイって聞いたけど……その程度か。女の子を泣かせるようじゃ、まだまだね。」

俺はちよつと笑った。

「……そうだね。」

……ああ、初めて口利くのに、こんな場面からじゃ不利だなあ……今野さんとは、さすがに無理かな……

ハルちゃんに似てるから、かなり気になってただけ。

俺は今野さんの足元を見て笑った。

「……でも社内一なんだ。うれしいな。」

今野さんは、嘲笑うように言う。

「ふ……あんた本当に頭が悪いのね。褒めてないわよ。」

「あつは。そうなの？でも嬉しいよ。理由はともかく、それで今野さんから話しかけてきてくれるなんてさ。」

「ふん……」

今野さんは腕組みして、吐き捨てるように言った。

「……ちよつと見ていられなかっただけよ。」

でもすぐに、少し笑った。

「でもスッキリしたわ。」

「え？」

「ふふ……殴られて当然よ。いい気味。」

「……」

俺はうつむいたまま、ちよつとドキツとした。

性格も、ハルちゃんに似ているんだね……

ナナミちゃんとは、お友達じゃないはずなのに、ほつっておけなかったんだ。

女の人って、そういう時やけに連帯感があるから。

今野さんは多分、俺に復讐したくてしょうがないんだ。だから声を

かけた。俺に追い討ちをかけるために。
なんて攻撃的。

……どうしよう。

ますます気になっちゃうなあ……どきどき。

今野さんは俺を蔑んだように言った。

「どう？少しは考え直した？」

「なにが？」

今野さんは高飛車に言った。

「……尻軽なんて最低よ。」

俺は地面を見たまま、ふっと笑った。

「そう？」

「ええ、そうよ。最低。」

「……不倫よりいいと思うけど？」

「！」

今野さんは腕組みしたまま、ぎくつと全身を硬直させた。

「……なんですか？」

俺は薄く笑って、ゆっくり立ち上がった。一步だけ、今野さんに近寄る。

でも今野さんは、気丈に俺を睨み上げた。俺はにっこり微笑む。

「ね……あんなのやめてさ、俺にしない？」

「は？」

今野さんは驚いたように俺を見て、嘲笑った。

「……呆れたわね。殴られたそばから、早速近くにいた私なの？」

俺は少し首をかしげた。

「うーん、そういうわけじゃないけど、前々から気になってて。」

「ふん……冗談じゃないわ。私はお手軽じゃないのよ。」

「そっか……残念。」

今野さんは警戒して言った。

「あんた……大人しそうな顔して、私にケンカ売ってるの？」

俺はにつこり笑った。

「まっさかあ……」

「そ。ならいいわ。」

今野さんは冷たく言っ、俺に背中を向けて歩こうとした。俺はその瞬間に言った。

「でも君は利用されてる。」

「！」

今野さんはピタリと足を止めた。

そのまま沈黙したので、俺は畳み掛けた。

「彼に大事にされていないよ……かわいいそうだね。」

今野さんは振り返らなかつた。そのまま言った。

「……なによそれ。」

「人事部の橋本主任でしょ？俺見ちゃったんだよね……君が遊ばれてちゃってるトコ。」

「……」

今野さんは、組んでいた腕をおろした。でも振り返らなかつた。

「俺だつたら、大事な人にあんなことしないよ。誰が来てもおかしくないような社内……誰かに見られたら、何か言われるのは君なのに。それこそ君のこと……どうなつてもいいと思つてる証拠なんじゃないかなあ。」

「……そうね。」

今野さんは冷静に言っ、スタスタ俺のところへ近づいてきた。

「ね、だからさ、あんなのやめて俺にし……」

バシイイッ！

「ぶっ！」

俺はまたしても顔を思いつき殴られていた。

俺は右頬を両手で押さえた。

「い、いつ……！」

「……余計なお世話よ。」

今野さんは低い声で言い捨てる、うつむいたまま屋上を去って行

った。

「いった〜……………」

ほんと痛くないけど。

でも、すごくびっくりした。

今野さんって、ナナミちゃんより、かなり力持ちだ。

「お……………女の子って……………ほんと痛いよね……………」

夜。

俺は気の合う同僚たちと、小さな飲み会をした。お昼休みに2連発で殴られたけど、気分を変えて、女友達と男友達、気の合う仲間と楽しんだ。

居酒屋から出て、タクシーでハルちゃんの待つ家へ帰る。

俺はテレビの画面を見るように、自分を見ていた。

あーあ……………顔は真っ赤で、足元フラフラ。完全な酔っ払いだ。

でも今日は、これくらいで丁度いいかも。

俺はこれからのことを考えて、ニヒヒと笑った。

お酒はあんまり強くない。

でも味がよくわからないから、つい飲みすぎてしまう。

記憶を無くしたら、飲む意味がないのに。

残念ながら、本当に全然覚えていない。

でも俺は、ウキウキ気分だった。

ハルちゃんとキス……………

ハールちゃんとチュー……………んふふ。

変な気分だあ。

もう一人の自分は、俺を見ているのに、ぜんぜん冷静じゃない。

もう一人の俺も、完全に酔っ払っている。

すごく気分がいい。

「たっただいまあ〜！」

玄関を開けて、すぐ近くの玄関マットに崩れ落ちた。

俺の後ろでドアが閉まるけど、もう立ち上がったってカギをかける気力は無い。

「せんせ〜？帰ったお〜！ただいまって、ただいまマット〜！」

きれいな玄関マットは、白くてフニフニしている。

まるで女の子みたいだ。

玄関マットに頬ずりをしていると、リビングの奥からハルちゃんが出てきてくれた。

鮮やかなハルちゃんは、ため息混じりに言った。

「……珍しく早いな。まだ11時だぞ。」

「んん〜？そうお？」

俺は玄関マットに顔をくつつけたまま、カエルのように潰れていた。でもハルちゃんはよく見える。

髪は後ろで結んでいて、新しい眼鏡をしていた。やっぱり黒縁だ。

黒いスウェットの上下。かなりリラックスしていたみたいだ。

いつ見ても、美人だね。

そんな、人に見せられない姿のハルちゃんも、大好きだよ。

だってハルちゃんの周りだけが、鮮やかだ。

色褪せた空っぽの世界がそこだけリアルに見える。

俺にとって、ハルちゃんだけが現実だから。

どうでもよくないのは……ハルちゃんだけだよ。

だから早く……触って。

俺に現実を見せて。

「水飲むか？友宏。」

「うん〜……」

「おい、そこで寝るなよ。今、持って来てやるから。」

「んー……」

それより、チュー……

ああ、まずい。

待っている間に、気を、失い、そ……

急に、口元に冷たい感触。

「ほら、しゃんとしろよ。」

「うー……」

今、ほんとに寝てた。

でもハルちゃんは、俺の上半身を起こして、水を飲ませてくれた。

その瞬間から。

ドラマや映画だった世界が変わる。

もう一人の俺が消えて、俺は自分の視界だけになる。

俺の姿が見えない。周りの景色も。

俺の視界には、今までになかった色鮮やかな世界が映った。

家の壁の色。

目の前にある透明なコップ。

それと、美人なハルちゃん……いい匂い。

ハルちゃんは息がかかりそうなくらい近くで、俺に水を飲ませてくれていた。

周りが見えないなんて、最初は不安だったけど。

これが普通らしいから。

「……ふは。」

水は飲み干したけど、ぜんぜんスッキリしない。

俺の目の前はクラクラしたままだ。

でも、見えるところすべてが鮮やかで、俺はすっごく嬉しかった。
ハルちゃんは満足そうに微笑んだ。

「よし飲んだか。まだ大丈夫のようだな……ほら立て……部屋に戻るんだ、色男。」

「んんー……」

まだ大丈夫……じゃないよ。

ああ、今度こそ……まずい。

クラクラする。

早くしないと……

俺の腕を取ったハルちゃんに、焦って言った。

「ハルちゃん……ちゅー、しよ。ハルた……ん……」

でも次の瞬間に、気を失った。

03・雨

俺は自分のベッドで夢を見ていた。
今回は悪夢じゃない。ちゃんとした夢だ。
でもハルちゃん抜きの実現よりリアルだった。

俺はブレザーの制服で、ぼうっとしていた。
学校の近くの商店街を歩いていた。
手にカバンは持っているけど、いつもより軽い。
体育バックがないから。

今にも雨が降り出しそうな空。
どんよりしてて、薄暗い。

色褪せている世界が、もっと暗く見えた。
時間は夕方。

でも、もうすでに真っ暗だ。雲がどんよりとしているから。

俺は、トボトボ歩く自分を見ながら、わけがわからなくなっていた。
なんで、どうでもいいのに……こんなにショックなんだろう。
サッカーできなくなったからって、なんだっていうんだ。
どうでもいいよ。

そんなコト。

それなのに俺の胸の奥は、空と同じように、どんよりした雲が立ち
込めていた。

……足なんて痛くないのに。
事故った時は骨がバラバラになったけど。

でもあれは事故じゃなかった。わざと俺を狙った。だってあの車、
一度俺を轢いてバックしてきたし。でも痛くなかった。自分の血の
色でさえ白黒に近い。

やっぱりこの世界って、現実じゃないんだ。
だって痛くない。

それに恐くなかったし。

お墓の方が、よっぽど怖いよ。

でも……夢の中なのに、サッカーできないんだ。

……なんでかな。

お医者さんがダメって言ったから？

なんでダメなのかな。痛くないのに。

いいじゃないか。夢の中なんだから、歩けなくなったって。

でもサッカー部のみんなは、俺を相手にしてくれなかった。

あんなに楽しくやってたのに。

手の平を返したように。

みんな、サッカーのできない俺には用がないんだ。

だから口も利いてくれないんだ。

俺は気分が落ち込んで、歩きながらため息をついた。

……どうでもいいよ。

……そんなコト。

どうでもいいのに。

なんだか変だ。ぼうつとして……

商店街を歩いている人たちも、どこかぼんやりしている。

塾に行く子供……

買い物中の主婦……

店のおじちゃん……

変だな……いつもより、よく見えないや。

俺は濃い霧のかかる街を歩きながら、ぼんやり考えた。

もしかしたら……俺が何かやっちゃえば、警察に捕まるのかな。

そしたら警察は俺たちのこと、調べてくれるよね。

今まで、当たり前前すぎて気付かなかった。

警察に言えばいいんじゃない。

殺される前に。

でも、なにかキツカケがないとさあ……やりにくいよね。
ふっと近くにあった本屋に入った。
じゃあ……なんでもいいよね。とにかく、何かやればいいんだから。
でも……こんなことするの、初めてだ……
これだって、どうでもいいコトだよ……
だって夢の中なんだから……
目の前にあった本に手を伸ばして……自分のカバンに入れようとした。

でもその瞬間。

あつたかい手が、俺の手首を掴んだ。

「！」

俺はびつくりして顔を上げると、そこには……

きれいな人がいた。

黒縁眼鏡をかけたその人は、息を切らしていた。走った後みたいだ。
「……運動部三年A組。杉田友宏だな。」

まるで警察みたいな喋り方だけど、俺と同じ制服を着ている。

襟足の長い黒髪だ。前髪も伸びてしまっていた。目に入りそうだ。
その目は少し吊りあがっていて、二重だった。

白い頬に、薄紅色の唇。

俺はその人に見とれてる間に、変なことに気が付いた。

あ……あれ……

あれ……？おかしいよ！？

俺が見えない。

俺はそれにびつくりして、キョロキョロと周りを見た。

なんて鮮やかな世界。

聞こうともしていないのに、勝手に音が耳に入ってくる。それなのに自分が見えない。俺の視界だけだ。まるで……自分の目だけで、見ているようだった。

すると、きれいな人は言った。

「……落ち着け。まだ未遂だ。」

「え……？」

その人は俺の手から本を取ると、その辺に置いた。

「来い。」

短く言つて、そのまま俺の手首を引っ張る。

「あ……」

なにがなんだかわからなくなって、俺はそのままズルズル引きずられた。

俺は連れて行かれていた間、ずっとキョロキョロしていた。相変わらず空はどんよりしていて、夜みたいに暗いのに……

なんて……鮮やかな世界なんだ！

小学生が赤い自転車に乗っている。真っ赤だ。見たことないくらいに赤い。

中年の主婦が、薄い黄色のカバンを持っていた。でもぼんやりしているわけじゃない。ハッキリしている。買い物袋からはみ出したネギが見える。鮮やかな緑色だ。

すい……！

聞かなくても、勝手に音が耳に流れ込んでくる。

遠くの車の音、自分の足音。

八百屋のおじさんが手を叩いてお客さん呼び込みしている。すれ違った人のイヤホンから、シャカシャカと音が漏れていた。

頬に、風を感じた。
俺の髪が揺れている。
いい匂いがする。

え……匂い？

匂いなんて、俺……！

な、何の匂い！？

まさか……この人の……！

俺の先に行くその人の匂いは、おいしそうなカレーの匂いとは違っ
た。

わさびのツンとした匂いでもない。

芳香剤のキツイ香りでもない……

ふんわりふわふわ。

いーい匂い。

さっきまでとは、まるで別の世界だ。

俺は初めて、ここが現実だと……思った。

俺に現実を見せたその人は、近くの公園に入って、俺の手を離れた。
そこは広い公園だ。サイクリングコースで小学生たちが自転車で遊
んでいた。

「あ……」

その人に手を離された瞬間。

また夢の中のような、ぼんやりした風景に戻った。

俺が、俺を見ている。

周りの景色も見える。

ただし、ぼんやりしたまま。

まるで曇りガラスを通して見ているようだった。

俺は、がっかりしてその人を見たら……

「……………！」
なんと、その人だけが、鮮やかだった。

いや、その人と、その周りだけが……丸く切り取られたように、まるで穴があいたように、その人の後ろがよく見える。

う、うそ……………なにこれ……………

俺は思わず言いそうになった。

……………なんだろ、これ……………

今、何が起きているんだろ……………

俺は開いた口が塞がらなかった。

その人は、眼鏡の奥から呆然とする俺を睨んだ。

「まったく……………何を考えてるんだ。あんな目立つところで……………」

「え？」

俺は首をかしげた。

本当に何のことだか、わからなかったから。

「やるなら、もっとうまくやれよ。面倒かけやがって……………まったく。」

「……………君……………誰……………？」

するとその人は、呆れたように俺を見た。

「なんだ。お前は自分の学校の生徒会メンバーも……………知るわけないか。運動部が自由参加の生徒集会に出席するはずがない。」

「生徒会……………」

「そつだ。お前ら運動部は、部費問題になると血相を変えるくせに、いつも……………」

一度言葉を切つて、つまらなそうに言った。

「……………まあいい。」

その人は、バカらしいという表情をした後で言った。

「進学部三年B組、城戸春人。生徒会書記だ。」

「きど……はると……」

「覚えなくていい。俺はお前の犯罪を止めるために、わざわざ声をかけた訳じゃない。」

「え、犯罪？」

俺はなんだかわからなくて、また首をかしげた。

「そうだ。万引きは立派な窃盗罪にあたる。これは覚えておけよ。」

「あ……そっか。」

ハルちゃんは呆れたように言った。

「どうせ、なんでもよかつたんだろ？あの本が欲しかった訳じゃない。」

「え……うん……なんでわかんのか？」

ハルちゃんは、一つため息をついた。

「お前が『日本経済の夜明け』なんていう刊行本を欲しがる訳がないだろう。」

「ああ……そう……」

そんな本だったんだ。

あんまり見てなかったから、よくわからなかった。

「犯罪なんかやめておけ。リスクが高すぎる。しかも何の解決にもならないぞ。もしストレスがたまっているなら、別の方法を考えるんだな。」

「う、うん……」

「それに、お前には無理だ。初めてなんだろ？バレバレなんだよ、拳動不審め。」

「う……ごめん。」

ハルちゃんは畳み掛けるように言った。

「……やってしまえば、謝って済む問題じゃなくなるんだぞ。小学生じゃあるまいし。」

「だからっ、ご、ごめんって……」

ハルちゃんは、またため息をついた。

「まあいい。俺はそんな説教臭いことを言いに来たわけじゃない。」

「え？」

「これだ。」

ハルちゃんはそう言って、自分の学生カバンの中から紙を二枚ほど取り出した。

俺は首を傾げたけど、それを受け取った。

なにこれ。

補習授業のお知らせ……？

「単位が足りないようだな、杉田。このままじゃ卒業できないぞ。」

「へ？」

俺はびつくりして、ハルちゃんを見た。

鮮やかな彼を見ながら、慌てて言う。

「じ、授業にはちゃんと出てるよ！？サボってないし！」

「ああ。退院してからはな。だがそれだけじゃ足りないんだ。入院中に単位を落としている。」

「へええ……」

「今年中に、単位の足りない不良どもを集めて、補習授業を行うことになった。それに出席すれば、ちゃんと卒業できるらしい。よかったな。」

「うへえ……」

俺は嫌な顔してみせたけど。

なんだ。

そんなどうでもいいこと、言いに来たのか。

「まったく本来なら先生がやらなければならぬ事を、なぜか俺が……されて……まだあと二人ほど……冗談じゃ……できれば校内で渡し……不良どもめ……何を考えて……」

ハルちゃんはブツブツと何か言っていたが、俺はほとんど聞いていなかった。

二枚のプリントを持ったまま、じっとハルちゃんの手の周り……

現実と夢の境目をじっと見ていた。
なんなんだろう、これ。
モヤモヤと、クツキリの境目。
こ……この辺かなあ。

「おい、聞いているのか？」
急にきれいな人に覗き込まれて、ドキツとした。

「う、うん……ごめん。」
でもそのドキツは、そのまま止まらなくて、ずっと胸の奥でトクトクしていた。

なんだろ。これ……
ほんとに、変だ。こんなの初めて……
ハルちゃんは俺を見て、しばらく沈黙した。

「……」
俺を気遣うように見ていたけど、すぐに視線を逸らして言った。
「ふん……ぼうつとしゃがって。また車に轢かれるぞ。」

「ああ、うん。そうだね……」
俺は目の前にいるきれいな人の瞳を、ずっと見れなかった。
もう一人の俺は、ちゃんと周りを見ていたけれど。

「……まあいい。確かに伝えたからな。」
「うん……」
俺は呆然と言うと、ハルちゃんは一つため息をついた。

「一応言っておくが、その補習に出席しようがしまいが、俺は困らない。好きにしる。だがお前の将来を考える上では、ちゃんと出席した方が今後有利だと思うぞ。」

「うん……そうだね……」
どうでもいいよ。
そんなコト。

それより……なにより……
今、目の前にある奇跡が気になってしょうがないんだけど。

でも俺の奇跡は、あっさりと後ろを向いて素っ気なく言った。

「じゃあな、俺は忙しい。」

「えっ!?!」

う、うそ!

もう行っちゃうの……!?!?

「ちょ、ちよつと待って!」

俺は慌ててその背中に声をかけた。ハルちゃんは面倒くさそうに顔だけ振り向いた。でもまだ背中を向けたままだ。今にも立ち去りそうだった。

「……なんだ。まだ何かあるのか?」

「お……お願い……」

「え?」

ハルちゃんは驚いて俺を見た。

「もう少しだけ……そばにいて……」

「!」

ハルちゃんは愕然として、ガンツと学生カバンをその場で落とした。

俺が、泣いていたから。

公園の中、池のすぐ近くにある東屋で、俺たちは降り出した雨を避けていた。

自転車で遊んでいた小学生たちは、雨に降られて歓声を上げて去って行った。

俺たちの周りには、誰もいなかった。

ただ雨が降っていた。

俺たちは同じベンチに座っていた。

俺は濡れた地面を見ながら、心の中に一つだけ引っかかっていたことを話した。

するとハルちゃんは言った。

「そうか……サッカー部員が、お前を無視したのか。」

俺はどういう顔をしたらいいのかわからなくて、弱く笑った。

「うん……きつとサッカーのできない俺は嫌いなんだよ。俺の取り得ってサッカーだけだからさ……それ、思い知らされちゃったんだよね……」

「……それはどうかな。」

「え？」

俺は座ったままハルちゃんを見た。

でもハルちゃんは俺を見ていなかった。池に降り注ぐ雨を見つめている。

「今まで、一緒にやってきた仲間なんだろう？」

「うん……」

「俺にはよくわからないが、青春してたんだろ？まるでドラマやマンガのように。」

「……う、うん……」

本当にドラマみたいだったけどね。

俺はMFのポジションにいて……ボールや、みんなの動きがよく見える。

いいパスを出すと、評判だった。

ハルちゃんはつまらなそうに言った。

「ふん……それなのに退院した途端に豹変か。しかも全員が示し合わせたように。」

「うん……何しに来た、まで言われちゃってさ……」

ハルちゃんは自分の座っている脇に手を置いて、ちらりと俺を見た。俺はその手に、ドキッとした。

なんて……きれいな手なんだろう。

すらっとして細くて……爪もいい形。

……似てる。

あの悪夢に出てくる、神様の手に。

だってこんなに、鮮やかな肌色。

「で？なぜもうサッカーはできないってわかっていたのに、サッカー部へ行っただ？退部なのがわかってるだろ。」

「う……………」

俺は答えに困った。つい、その手から目を逸らす。

「なんとなく……………いつも通りに、自然に……………」

「習慣ってやつか。まだ諦めきれていないんだな。」

俺はため息混じりになってしまった。

「そうかな……………そうかも……………」

あれ……………

今まで、どうでもいいと思っていたのに。

ハルちゃんと話していると、まるで現実のような気がしてきた。

俺、本当に……………

二度と、サッカーできないのかな。

「……………で。お前の足に今度何かあったら、一生歩けなくなると医者から脅かされているというわけか。」

「うん、でも、でもさあ……………何もなければいいわけで……………」

ハルちゃんは呆れたように言った。

「そんなわけにいくか。お前が一番よく知っているはずだろうが。」

サッカーは接触の多いスポーツだ。このまま続けたら、何かあるに決まっているだろ。」

俺はうつむいて、しどろもどろになった。

「それは……………そうだけどさ……………」

「ま……………頭ではわかかっていても……………というやつか。」

「……………」

俺たちは、そのまましばらく沈黙した。

でも、ハルちゃんは軽く笑った。

「ふん……なるほどな。それでか。」

「え？」

なにが……それでなんだろう。

俺が真剣に首を傾げていると、ハルちゃんはベンチに手をついたまま、またちらりと俺を見た。

「……ワザとだよ。部員の連中はワザとお前を無視したんだ。実際にみんなで示し合わせた。」

「！」

俺は急に情けない声になってしまった。

「え……ワザと……？なんで……？そんなのイジメじゃん……」

ハルちゃんは冷静に言った。

「お前にサッカーを諦めさせるためさ。」

「！」

「お前の仲間は、お前の将来を考えて、サッカーを辞めさせることに決めた。たとえサッカーができなくなっても、歩けなくなるよりはいい。サッカーはチームプレーだ。仲間の協力がないとやっていけない。逆にそれを利用したな……仲間のいなくなったお前には、サッカーができない。だがそれはお前の足を守る結果になる。お前の将来もな。」

「……！」

俺はやっと、どういうことかわかった。

初対面のハルちゃんに全部説明してもらって、やっと……

俺って……バカだ。

どうでもいいなんて、ウソだった。

サッカーができなくなった事は、俺にとって大きなことだった。

俺はそれに気付かなかった。

痛みのない、夢の世界だと思っていたココは、現実だったんだ。体の痛みは感じなくても、心の痛みは感じていたんだ。

それを、どうでもいい振りして。

本当は、大事なことだと気付くのが恐かっただけ……！

ただ痛みを知るのが恐かっただけ……！

ハルちゃんは静かに言った。

「いい仲間を持つてるんだな……俺にはいない。悪役になってまで、将来を守るうとしてくれる仲間か……羨ましいよ。」

「っ……」

俺の膝の上に乗せていた手が震えていた。

胸の奥が、何か熱くなって……また、涙が溢れていた。

ハルちゃんはそれ以上何も言わずに、そっと俺の肩に手を置いた。

その瞬間。

また世界が変わる。

サアア……と雨の音が耳に入ってきて。

曇っていたガラスが、すっきりと拭き取られたように見えて、でも視界がいつぱいに濡れて歪んで。

ハルちゃんの手が、やけにあつたかくて。

俺はその手に集中して……

でも耐え切れなくて、うつむいて肩を震わせた。

「っ……なんで……」

俺の声は、勝手に震えていた。

「なんで……君まで、泣いてるの……？」

ハルちゃんは冷静な声で横を向いて言った。

「……泣いてねえよ、タ。」

04・ちよつとした事件

朝。

今日はいい夢見た。

懐かしい夢だ。

俺は気分良く電車に乗っていた。

今日は二分遅刻する電車じゃない。一本前の電車だ。

今日は遅刻じゃないんだ。きつと課長も怒らない。

ま、どうでもいいや。気分いいし。

俺は電車を降りて、駅を出て……会社に向かう途中で気がついた。

……ふうん。

朝から要刑事が俺をつけてるけど。

ま、それもどうでもいいや。

狙われているわけじゃないみたいだしね。

俺はルンルン気分で、会社に入ろうとした。

ところが、美女二人が待っているはずのエントランスホールでは、ちよつとした事件が起きていた。

たくさんの方がそこにいた。

人ばかりだ。

俺は背伸びをして、中を覗き込んだ。

なに？なんだろ。

俺は聞き耳を立てた。そこらじゅうからヒソヒソ話が聞こえている。でも聞こうとしなくても、大きな声がエントランス中に響いた。

「つてめえ！ざけんじゃねえぞ！」

あんまり突然で、俺はちよつとビックリした。

柄の悪い男の声だ。かなり興奮して怒鳴っている。

「こっちの台詞よ。大声出せば済むと思って。」

女性の声はやけに冷静だ。

あ。今野さんだ。

昨日、俺を殴った女の人。

すでに制服姿だった。

今野さんを脅しているのは、赤いジャージ姿のでかい男で、首に金のネックレスをしている。見るからに暴力団系……の下っ端みたいに見えた。

みんなはそれを遠巻きに見ている。

みんなのヒソヒソ話によると、どうやら最近別れた彼氏みたいだ。

今野さんにヨリを戻そうと迫っている……らしい。

「俺にそんな口が利けると思ってるのか！ああ!？」

「こんなところまで来て、何考えてんのよ。」

「仕事なんかできなくしてやるよ。俺の相手ができねえなら会社なんか辞めちまえ!!男ができたなんてウソつきやがって!!」

「ウソじゃないわよ。」

「じゃあ呼んでこいよ。できねえんだろ!？」

「なんでアンタにそんなこと言わなきゃならないのよ!」

今野さんがそう言うと、人だかりの中の一人が、慌てたように会社の中へ入って行った。

ああ……橋本主任。

逃げたよ。

ま、さすがに不倫じゃ、名乗れないよねえ……

それにしても恋人が困っているんだから、逃げることないのに。さりげなく助けに入るとかさあ……

でもそれは、橋本主任だけじゃなかった。

誰も助けない。

相手の男の風貌がヤクザっぽいから、怖くて近寄れないみたいだ。当の今野さんも、冷静に言い返しているけど、ちよっただけ手が震えている。

……きつと今までに暴力とか受けてたんだらうなあ。

今野さんは、逃げた橋本主任を見て、ぐつと下唇を噛んだ。

その時、始業のチャイムが鳴る。

言い争いをしている今野さんを置いて、みんなバラバラに会社へ入って行った。

俺もこっそり、その流れに乗って、受付へさり気なく寄る。

受付の美女に声をかけた。

「ね、もう警察呼んだ？」

みゆきちゃんは目を潤ませて言った。

「あ、杉田君……うん、呼んだよ。もうすぐ来ると思う……でも、どうしよう、あたしが今野さんと呼んじやって……」

きつと不審者は門前払いするとか、警察呼ぶとかって、マニュアルで決まってるんだらうと思う。

みゆきちゃんは、悪いことをしたと思っているみたいだった。

俺はニツコリ笑って言った。

「ん、大丈夫だよ。きつとすぐ来てくれると思うし。」

見物人が少なくなったからね。

目立つの困るけど、やっと助けに入れる。

通りの向こうから、要刑事が見てるけど。

まあ、うまくやるよ。

「俺から逃げられると思うなよ……！サキ！」

「ふん。なによ、子供みたい。」

「なんだとテメエ！！」

「キャ……！！」

大男は興奮して、今野さんの胸倉に掴みかかった。

みゆきちゃんが、はつと息を飲む。

俺は二人の間に、強引に割り込んだ。

「ハイ、ストップ、ストップ〜！」

大男は俺に押されて、手を離れた。

よろけそうになる今野さんをさり気なく支える。でも誰にも気付かれないうちに、すぐに手を離れた。

「なんだあオメエは!？」

俺は大きなジャージ男を無視して、今野さんに笑いかけた。

「おはよ、今野さん。もうチャイム鳴ったよ?せっかく早く来て着替えてたんでしょ?早く行かないと、遅刻になっちゃうよ?」

「杉田……」

今野さんは、ちょっと驚いた表情をしたけど、すぐに視線を逸らして言った。

「……いいのよ。もう。」

こんなところを見られたら、もう会社にいられない。そう思っているみたいだった。

……そんなに思い詰めることないのに。

「な、なんだオメエは?」

男は無視されて、呆気にとられたようだった。

でも俺は更に無視して今野さんに言った。

「じゃあさ。俺今日、有給取るからさ、今からデートしてよ。」

「……は?」

今野さんは目を丸くした。

それと同時に、俺の背後で大男が顔を真っ赤にして怒った。まるで茹でタコだ。

「おいコラ……!なんなんだオメエは!!!」

大男は俺の胸倉を掴んで引き寄せた。至近距離で凄まれる。

「うわ、え、なに?」

でも俺は恐くなかった。

だって、テレビの中の人に怒鳴られてもねえ。

「ああそついえば君、誰？」

今、思いついたように言うと、男は更に怒ったみたいだ。

「サキの男だよ……！俺の目の前で誘いやがって！」

今野さんは焦って言った。

「ちよ、誰がアンタの……！」

「へえ、そうなんだ。知らなかった。」

俺はニツコリ微笑んだ。

「でも俺は、好きな人を大声で脅したりしないよ？」

「てんめえ……いい度胸だなあ……！」

今野さんは男の腕をぐいぐい押している。

「ちよつと……！やめなさいよ！その手を離して！！」

俺はでっかい男に引き寄せられて、爪先立ちになっていた。

うわ、バランス崩れる。

俺は多少、引きつったような表情になった。

「あ、ああうん、よく言われる。俺、空気読めなくてさ。」

「なんだとお……！」

でも、本当に度胸がいいって言うのは、ハルちゃんみたいな人のことだよ。

俺なんか、ただのビョーキだ。

大男はいきり立ったように俺に怒鳴った。しかも至近距離で。

「テメエがサキの新しい男か！」

「へ？」

「違うわよ！なに言ってるのよ！！」

今野さんは、慌てて俺と男の間に入ろうとしていた。

俺はそれを無視して笑った。

「ああ、それいいね。」

「なにっ！？」

俺は笑ったまま言った。

「……そだよ。俺がサキちゃんの新しい彼氏。」

サキちゃんは、俺の隣で愕然とした。

「な……なに言ってる……！」

「っ……！ぶっ殺してやる……！」

大男は俺の胸倉を掴んだまま、片手を離して拳を作った。その動きで、縋り付いていたサキちゃんが振り放される。

俺は慌てて叫んだ。

「わ、わっ！」

その瞬間から、もう一人の俺の目には、スローモーションに見えた。サキちゃんがよろけて、コケそうになっている。

ああ……足首、ひねってないといいけど。

「わぁー！」

俺自身は焦った表情をして、手を振り回していた。

……しかしこの人。

おっそいな。

もう一人の俺は呆れ返っていた。

頭に血が上っているのか、掴んでいるから俺が避けられないと思っているのか。

モーションがでかすぎる。後ろに引きすぎる。

こんなに遅いんじゃ、まとも当たっても、たかが知れてる。それに。

会社の外から要刑事が見てるし。

遠すぎてどんな表情かわからないけど。

俺はそのまま、くらうことにした。

バキィ……！

俺の顎に、まともに入った。

その衝撃で、俺を掴んでいた手が外れる。

俺はそのまま後ろにぶっ飛んだ。

うわ！

こんなに派手にぶっ飛ぶとは思わなかった。よろける程度かと思っていた。でも体重差がありすぎたみたいだ。俺は後ろの受付の台に、

思いつきり後頭部を打った。

「ぐっ!!」

「キヤアアッ!」

受付のみゆきちゃんの叫び声。

あ、まずい。この感じ……

痛くないけど、意識が遠のいていくのがわかった。

「杉田!」

「杉田君、しっかりして!」

二人の女の子の声に、俺ははっとした。

どうやら、ちょっとだけ気を失ったみたいだ。

でも、その間におまわりさんが来てくれたらしく、大男は取り押さえられていた。

「離せコラア!ぶっ殺すぞ!アアッ!？」

「暴れるな!」

「暴行の現行犯だぞ!わかってるのか!!」

二人の制服の警察官が、大男に馬乗りになって押さえつけている。

あ……よかった。来てくれたんだ。

でも、もうちょっと早く来てくれればよかったのになあ。

さすがにハルちゃんみたいにうまくはいかなかった。

ハルちゃんならきつと、殴られたりしないで、うまく時間を引き延ばしたりできるんだと思う。

サキちゃんは、ほっとしたようにため息をついた。

「ああ、良かった、杉田。気がついた。」

「よ、よかったあ……死んじゃったかと……」

みゆきちゃんは、ウルウルと目を潤ませている。

「あ、あは。大丈夫みたい。」

俺はそのまま動かずに、少し笑った。

口の端がちょっと引きつる。

奥歯がぐらぐらしているような気がする。痛くはないけど。

いやあ……

それにしても……

すぐ目の前に、二人の美女が……！

倒れている俺を心配そうに覗き込んで、すぐ近くで揺り動かしていたらしい。

まるで覆いかぶさるように、二人で俺を覗き込んでいた。

うはあ………！

む、胸が………！

目の前にある、ふくらみと谷間に、俺は一気に夢見心地になった。

キツネ顔の美女と、犬顔の癒し系。

うへへ。

ちよーラッキー！

美女二人に囲まれてデレデレしていると、制服を着たおまわりさんが近寄って言った。

「大丈夫ですか!？」

「あ、大丈夫です」

俺は、ゴツイ男の人の顔を見たくなくて、目を閉じてゆっくり起き上がった。

まあ見ないようにしてても見えちゃうんだけど。

ほんとはもうちょっと寝ていたかったけど。

制服のおまわりさんは心配そうに言った。

「念のため、検査をしたほうが……少し気を失ったみたいですから。」

「いや、ほんとにたいしたことないですよ。平気平気。」

予想通り、顎が砕けるほどじゃなかったしね。

でもちよつと失敗かな。

一瞬でも気を失うなんて。

もし刺客がいたら、きつともう死んでる。

父さんが生きていたら、ものすごく怒られそうだ。

「それに検査なんかしたら、おバカなのがバレちゃいますよ。あはは。」

俺が頭をかくと、制服のおまわりさんは、ちよつとほつとしたようだった。

「そうですか……訴えるのでしたら病院に行つた方が有利ですが。」

「いや、訴えませんよ。大丈夫。」

「そうですね。じゃ、ちよつと事情を聞かせてもらえますか。」

ああ、やっぱりそう来るか。

うーん、それより美女二人に心配されていた方がいいなあ……

「ハイ……」

俺は名残惜しく立ち上がった。

それから一時間くらい、おまわりさんに事情を聞かれた。

といつても、俺はほとんど事情なんか知らないから、ただ今朝のいきさつを話したただけだ。

サキちゃんは、あの男とは別室で色々聞かれているみたいだった。

盗み聞きした内容では、俺なんかよりも、ずっと時間がかかりそうだ。

もうデートどころじゃなさそうだった。

半分、本気だったのになあ。

会社に戻って、自分のデスクにコートを置くと、みんなから注目された。

でもそれは今までにないくらいにあつたかい視線だ。

みんなニコニコしている。

どうやら今朝のことはすぐに会社中に広まったみたいだった。

隣のデスクの山ちゃんが言った。

「よっ、ヒーロー！」

すると、みんなが口々に、はやし立てた。

そこかしこから口笛が聞こえる。

「やるじゃん杉田！」

「ヒュー！」

「カツコイイ！」

俺はびつくりして笑った。

「え、えええ!？」

山ちゃんが笑いながら言った。

「聞いたぜ。女の子をかばって殴られるなんて、やるじゃねえか。かっこつけすぎだってえの。」

「か、かっこつけてないよ！殴られたんだから。」

山ちゃんが笑った。

「ま、かっこ良く助けるなら、殴られたりしねえよな。」

すると、課長がわざとらしく咳払いした。

「コホン。」

みんなは慌てて仕事に戻る。急に静かになった。

課長が言った。

「杉田。ちよつと来い。」

「あ、はい。」

俺が課長の近くへ行くと、課長はまた咳払いをした。

「……また遅刻だな。」

「はい。スミマセン……」

課長は、手当てしてある俺の顔を見て、無表情に言った。

「傷の方はもういいのか。」

「あ、大丈夫みたいです。」

「……ふん。頭なんか打って、バカがこれ以上バカになったらどうするんだ！」

「あはは、そうですよねえ。」

俺が頭をかいて笑うと、課長もちよつと笑った。

「で……今日は休まなくていいのか。」

「はい。おまわりさんには、もういいよって言われたので。」

「病院は？」

「行かなくて平気です。おバカは治りませんし。」

課長は笑った。

「……確かにな。」

それを聞いていた社員のみんなも、ぷぷつと笑った。そこかしこからクスクス聞こえる。

「……行ってよし。無理はするなよ。」

「はい。」

「短く！」

「はいっ！」

俺はふざけて敬礼して、自分の席に戻った。

お昼休み。

俺はいつもの通りに屋上へ出る。

いつもの行動を急に変えたら、きっと要刑事に怪しまれる。

それに万が一、ナナミちゃんがお弁当作ってきてたら、悪いし。

昨日と同じ、隣のビルからは死角の位置に入る。

ベンチに座って伸びをして、ついでに欠伸もした。

でも、しばらく待っても、ナナミちゃんは来ない。

まあ、さすがに昨日の今日じゃねえ……

俺は諦めて、食堂で食べようかと思っていた。

その時に、突然誰かが俺の隣に座った。

しかもベンチが揺れるほど乱暴に。ドカッと。

「うわ、びっくりした。」

本当にちよつとびっくりした。

まさか女の子が座っただけで、こんなに揺れると思わなかったから。
「これ食べな。」

「……今野さん。」

サキちゃんは俺に大きめの包みを差し出した。
どうやらお弁当みたいだ。

「……あ、ありがとう。いいの？」

「ええ私、警察でカツ丼食べてきたから。」

俺はその言葉に、軽くシヨックを受けた。

「け、警察でカツ丼って……！そんなベタな。っていうか犯人みたいじゃん。」

サキちゃんは、真つ赤な唇で笑った。

「ドラマの見すぎよ。ちゃんとお金取られたわ。私が選んだし。」

「そ、そうなんだ……おごりじゃないんだ。」

「ええそうよ。ラーメンでもよかったけど、ドカ食いたい気分だったから。」

「な、なるほどお。じゃ、遠慮なくいただきます。」

「はい、どうぞ。」

俺はサキちゃんのお弁当を開けた。

それはナナミちゃんのお弁当のような、かわいくてきれいなお弁当じゃなかった。まるで男性用の平らな四角いお弁当で、中身はトンカツと唐揚げ。しかも、ご飯の部分は、お米じゃない。全部細かいキャベツが入っていた。

俺はそれを見て、ちょっとびっくりした。

「……ごはんがない。」

揚げ物とキャベツだけだ。

でも俺は手を合わせた。

「いったただきまーす！」

もぐもぐとキャベツをかつこんだ俺を見て、サキちゃんはちょっとびっくりしたみたいだった。

「た、食べるの？それ……」

「え、なんで？」

まさか昨日に引き続き、酢が入ってるのかも違和感ないなあ。

サキちゃんは、ちよつと視線を逸らした。

「いやその……私用に作ったものだから。普通は嫌がるかと思ったんだけど。」

「えー、そんなことないよ。おいしいよ？この唐揚げ。」

「それはいいんだけど……ま、いいわ。無理しなくていいのよ。」

「無理してないよ。キャベツもうまいし。」

サキちゃんは、ほつとしたように少し笑った。

「そ、そう……良かった。私こう見えても大食いなのよ。揚げ物とか好きで。でも食べ過ぎると太るから、お昼はご飯の代わりにキャベツなの。レタスの時もあるけど。」

「へえ〜そうなんだ。」

サキちゃんは諦めたように言った。

「でも今日は、カツ丼大盛り食べちゃった。」

「あつは……いいんじゃない？たまには。」

サキちゃんは、ちよつと笑った。

「……あんた優しいのね。」

「そう？そんなことないよ。」

「その……ありがとね、助けてくれて。」

「ん？……ぜんぜん助けにならなかったよ？ただ殴られただけだし。」

「

サキちゃんは、うつむいて微笑んだ。

「でも……あんたしかいなかったわ。」

「……ねえサキちゃん。」

俺が呼ぶと、サキちゃんは驚いて、ちよつと顔を上げた。

「サキちゃん？」

「あ、ごめん。サキちゃんて呼んじゃだめ？」

ハルちゃんは、ちゃん付けで呼ぶと怒るから、今は呼び捨てにしているんだけど……ほんとは嫌なもんなのかなあ……？
でもサキちゃんはすぐに笑った。

「ふふ。いいわよ別に。」

「よかった……サキちゃんは、あんな人と付き合ってたの？」

「んー、そうね。」

サキちゃんは長い足を組んで、腕組みした。

腕組みがくせなのかもしれない。

「最初はあんなんじゃないかったのよ。ちゃんと働いてただけで、私と付き合ってからいきなり仕事辞めて、私のお金でパチスロ始めちゃって。別れるの面倒で、そのまま放置してたら、今度は覚せい剤。」

「えっマジで？」

ほんとは警察でちょっと聞いたけど、俺はびっくりした。

まさかそんなことを俺に話すとは思っていなかったから。

サキちゃんは自嘲して笑った。

「……ちゃんと告発してきたわ。あいつは当分出られない。今のうちに引越してもするわ。」

「そ、そうだね……それがいいかも。」

サキちゃんは、ため息のように言った。

「……私、だめなのよ。男を見る目がないの。いつもそんな感じ。」

「へえ」……

「でも、あんななら。」

「え？」

俺はキャベツを食べる手が止まった。

サキちゃんは俺を見て笑った。

「……今夜、ヒマ？」

俺はキャベツをごくくと飲み込んだ。

「……マジで？」

「……マジで？」

俺は箸を片手にドキドキして焦った。

ハルちゃんに似てる人からお誘いなんで。

どういう急展開？これ。

「え、ええ〜っとな俺、ものすごく嬉しいけど、今日、営業課全体の飲み会が……」

サキちゃんは、あっさり言った。

「そう。」

「ああっ、でもでも！人数増やせるよ。サキちゃんが来てくれたら、きつとみんな喜ぶと思うな！」

サキちゃんは自嘲した。

「……まさか。誰も喜びはしないわ。」

「そんなこと……」

「でも、他の子なら喜ぶかもね。」

サキちゃんは俺を遮って言った。

「へ？」

サキちゃんは俺を見て、悪戯っぽく笑った。

「四人ほど追加しておいて。秘書課の女の子を三人連れて行くわ。後輩だけ。」

「ええっ！？本当！？」

「ええ、もしよければけどね。」

「大歓迎だよ！きつと山ちゃんが飛び上がって喜ぶよ！」

「そう、よかった。」

俺たちは微笑み合った。でも……

誰がいる。

近くに誰かの気配。

サキちゃんが笑いながら言った。

「でもその後で……今度は私に付き合っつてよね。」

俺は内心で、その人物を気にしながら言った。

「え……それってもしかして。」

「ふふっ……キャベツが付いてるわよ。」

サキちゃんはざらつと長い髪を揺らして、俺の顎にキスした。

「……うっそ。」

ちよーラッキー！

そんなことってアリー！？

俺は舞い上がったけど、すぐにはっとなって言った。

「え、でもでも、主任は？いいの？」

サキちゃんは、吐き捨てるように言った。

「ああ、もういいのよ、あんなの。私、目が覚めたの。」

「そっかあ、うれしいな……！」

屋上に出るドアの前で、男が一人立ち尽くしていた。

橋本主任。

すぐそこにいるけど。

「あー……でも俺、すごく嬉しいけど……束縛されんの嫌いで。だから特定の彼女作らないつもりでいるんだ。でも……サキちゃんなら考えちゃうなあ……」

サキちゃんは笑って呟いた。

「いいわよ、別にどうでも。」

「……」

サキちゃんは。

橋本主任がすぐ近くにいること、知ってるんだ。

いや、それどころじゃない。

橋本主任はお昼休みに屋上に来たことないのに。きつとサキちゃんが呼び出したんだ。

わざわざ呼び出して、これを見せて……

俺はトンカツを頬張りながら言った。

「ほうだね……サキちゃんは主任と別れられれば、ほれでいいんらも

んね。」

サキちゃんは腕組みを解いて、妖艶に笑った。

「……そうよ。役に立たない男はいらわないわ。」

俺は、ふふつと笑った。

「……女の子って……たまに怖いよね。」

05・呼吸

夜。

俺はシャワーを浴びていた。

いつものラブホテルだ。

俺の頭の上からは、湯気の立つお湯が降り注がれている。

でも……熱いのか、ぬるいのか、冷たいのか。

俺にはよくわからない。

ただ濡れた感触。

湯気が立っているし温度が表示されてるから、きっとあったかいんだと思う。

俺は女の子の匂いを消すためにシャワーを浴びた。

匂いなんて俺にはよくわからないけど。

だからこそ気になるから。

シャワーを止めてバスタオルで体を拭く。頭をゴシゴシ拭きながら、でっかいダブルベッドの中を覗き込んだ。そこにはハダカの女の子が熟睡している。

……サキちゃん、寝顔もきれいだね。

ハルちゃんに似ている子のAV映像は、かなり燃えた。

でもハルちゃんじゃない。

決定的に違うのは、サキちゃんは俺の現実じゃないってこと。

ついでに性別かな。

ま……どうでもいいよ。性別なんて。

ハルちゃんは性別を超えた存在だから。

……俺の神様だから。

俺はパンツだけ穿くと、短いタオルを熱いと思われるお湯に浸して絞る。

「きれいにしてあげるね。」
一応話しかけて、ぐったりとした女の子の体を優しく拭いてあげた。サキちゃんの体はふにゃふにゃしていたけど、適度に引き締まっている。土曜日にジムに行くのが趣味だと言っていた。かつこいいプロポーションだなあ。
きつとハルちゃんが女の子なら、やっぱりこんな感じ。
でもハルちゃんは運動なんかしないんだろうな。
ハダカは見た事がない。

……いや……

本当は一度だけ見たことがあるけど。
本人は覚えていない。
だから。

昼間の俺も覚えていない。
でも今は。

どうやったらもう一度見れるか、女の子とエッチする度に考えてる。
濡れたタオルで体中を拭いているのに、サキちゃんはピクリともしなかった。

「……よく効くね。」
睡眠薬。

俺はサキちゃんを拭き終わると、大きなバスタオルで包んであげた。
お腹周りはおもう一枚嚴重に。
女の子は冷えるといけないしね。
その上から、軽い毛布と、ふかふかの羽毛布団を丁寧にかけてあげた。

これでよし。
明日は土曜日だからね。朝までゆっくりオヤスミ。
俺の……夢の中の人。

俺は首にかけているタオルで、まだ自分の頭を乱暴に拭く。そのまま液晶テレビの後ろに回った。床に近い壁を押すと、そこがひっくり返る。

俺は中にあるボタンを押した。カチンと遠くで音がする。俺にしかわからない程度の、小さな音。

俺はそこを元通りにすると、トイレに入った。

トイレのタンク……その奥の壁が少しだけ浮いている。

俺はそこを迷わず押した。

中は真っ暗だ。

右手の壁のスイッチを押すと、やけに明るいライトが中を照らした。六畳ほどの小さな部屋だ。パイプ椅子と小さな机がぼつんとある。

机の上には、いくつかの携帯電話が並んでいた。突き当りには、服を入れるケースがある。

その隣のパイプの棚には、簡単な医療道具と俺の商売道具。

狭い部屋の奥には、黒くて四角い箱。

中身は大量の札束。

なぜかあるんだ。

……お金なんて。

どうでもいいのに。

俺は突き当たりのクリアケースから黒のジャージを取り出して、手早く着た。そこにある白い靴下に、安めのジョギングシューズも履いた。ニットの帽子に、フリース生地のマフラーも身につけた。白くて薄い手袋をはめる。

……女の子なら誰でもいいんだ。

こここの隠し部屋を使いたいから。

ただ、それだけ。

朝まで女の子と一緒にいたってことになっていれば、あとはどうで

もいいしね。
サキちゃんは……これからも、使えそうだ。

俺は机の上の携帯電話を一つ取った。

履歴は、たった一つしかない。俺はそこに電話をかけた。
しばらくして女の人が出る。

「……あら、結構のんびりしていたわね。今夜はもう寝るのかと思
ったわ。」

俺は少し笑った。

「ふふ……冗談。一日何もしないと、遅れを取り戻すのに二日かか
るんだよ?」

「へえ、そういうモノ?」

「そうぞ。事務員さんにはわからないかもしれないけどさ。」
女の人は少し笑った。

「……そうね。でも、いつもより遅いじゃない。そんなに燃えちゃ
った?」

「……」

「ふふ……似ているものね。あなたのKey^{カギ}に。」
カチンときた。

大事なハルちゃんを、そんな風にかかわれたくない。
でも俺は、ふふつと笑った。

「それ……言ったら殺すよ?前にもそう言っただけけど?」

「……冗談よ。自分より上のコードメンバーに逆らったりしないわ

……」

「ふうん……スリル求めているのかと思った。」

「……まさか、くせになったりしないわ。」

「……」

昨日と同じこと、言うんだね。

俺専属のUは、ため息をついてから言った。

「今夜も何も命令はないわよ。最近、めっきりヒマになったわね。」
「ふうん、いいことじゃない。嬉しいね。」
「ええ……そうね。」

最近、ヒマになったのは、俺を動かしたくないからだ。
そこにAの慎重な思惑^{キス}がある。
それを……彼女は知らない。

俺は気を取り直して言った。

「それより俺、昨日からつけられてるみたいなんだけど。」

「え？」

彼女は、緊張した声を出した。

「……誰？」

「心配ないよ。俺の顔見知り。」

「そう……もしかして消すの？」

「んにゃ……放っておくよ。どうせすぐ諦める。」

「ふうん……でも、そんなの初めてじゃない？気になるわね。何者？」

「ああ、刑事さんだよ。」

彼女は急に焦ったように言った。

「……ちょっと！ほんとに放っておく気？」

「うん、むしろ放っておいた方がいいよ。」

「どうして？」

「……あの人普通じゃないんだ。半日も、つけられていることに気が付かなかった。尾行の仕方、かなり離れている。下手に動くと危ないよ。」

「……そう、あなたがそう言うなら。」

……冗談。

ハルちゃんを巻き込めるかってえの。

俺はちよつとだけ笑うと移動した。

話しながらトイレから出る。

「大丈夫だよ、俺は尻尾を出さない……絶対にね。」
なぜなら……昼間の俺は全部。

ウソじゃないから。

あんなに頭のいいハルちゃんも。

ウソじゃない俺を、見抜くことはできない。

「……そうね、それは知っているわ。もし動きがあったら教えてちようだい。それまでは上に黙っておくから。」

「ありがとう。」

俺はサキちゃんのカバンを開けた。

なるべく中を動かさないように、黒くて長いサイフだけ指でつまんで取り出す。手袋のまま中を開けて、免許証を取り出した。

「一枚、地図を送ってくれる？今から住所言っし。」

「いいわよ。」

俺はそこに書いてある住所を言った。

「おっけー、切ったらこの携帯に送るわ。」

「ありがとう。」

「じゃあね。」

携帯を切ると、そのまま免許証と財布を元通りにしまった。

「……いつてきます。」

すやすや眠るサキちゃんに話しかけて、俺は部屋を出た。

俺を乗せたエレベーターは、下へ行かずに上へ登っていった。
最上階から非常階段で屋上へ。

重たい鉄のドアを開くと、そこはビル風に包まれていた。

俺はマフラーで顔の下半分を隠すと、屋上から下の道を覗き込んだ。

……誰もいないみたいだ。

一つ息を吐く。集中の準備だ。
そして……いきなり屋上から飛び降りた。

落ちる途中で、壁を蹴る。

向かいのビルの非常階段へ飛び移った。

ビーン……

飛び移った先の手すりが鳴る。

あれ、ちよつと失敗だ。

俺はそれを手で掴んで止めた。

そのまま階段で下りる。

足音を立てないように、つま先だけで

地面までたどり着いた先に。

要刑事が歩いていた。

彼は後ろ姿だ。

駅まで歩いている途中みたいだった。

俺は身を潜めながら感心した。

……へえ。

まだいたんだ。

寒いだろうに、ご苦労さま。

でも、もう帰るみたいだ。夜はこれからののにねえ。

俺は小さく手を振った。

バイバイ。

すると要刑事は立ち止まった。

……おつとお？

俺は、さつと隠れた。

こっそり様子を見ると、要刑事は上を向いて、ぐるっと空を見渡している。

雑居ビルの立ち並ぶ、狭い空。

……ふうん……

やっぱりこの人。

普通じゃない。

要刑事が見ているのは、夜空なんかじゃない。

……知っているんだ。

俺たちが、上を移動できることを。

頭の上なんて誰も見ないから、移動しやすい。

やっぱり下に降りてきて正解だ。

あのまま移動していたら、見つかるところだった。

……でもすごいな。

あの人。

ただ立っているだけなのに隙がない。

本当に直接対決は避けたいな。

何よりハルちゃんが巻き込まれる。

要刑事はそのまま歩き去った。

ちゃんと駅まで見送ってあげた。

俺は今度こそ手を振った。

また明日ね。

要刑事。

何日でもつきあってあげるよ。

君が諦めるまで。

俺は真夜中の夜道を走っていた。

ジャージの上はパーカーでマフラーに帽子。

どこからどう見ても深夜のマラソンだ。

パトロール中のパトカーに見られたけど、特に何も言われなかった。住宅街の道に入ると、真夜中だから誰もいない。

俺はマラソンの走りから、ぐんぐんとスピードを上げていった。

忍び走りに変える。地面につくのは俺のつま先だけ。

もっと速度を上げていく。

目の前に下りの階段。

俺は階段の手すりに乗って、シャツと靴底を滑らせて降りた。

スピードをつけたまま、民家の塀へ跳ぶ。

ブロック塀の上を、スピードを落とさずに走った。

ここってやっぱり、夢なのかもしれない。

どんなに走っても息が上がらないし、疲れない。

汗だってかかないし、体が熱くなることもない。

でも丸二日走った時は、急に体が動かなくなったから、一応、限界はあるみたいだった。

住宅街の細い道は、大通りに面していた。

俺は塀の上から飛び降りて、スピードを緩めずに走った。

俺には、自分が走っている姿が見える。

大通りの状況も。

深夜で、車はまばらなのに、派手なトラックが走ってくる。

大通りの向こうから、小さな黒猫が、闇夜に紛れていた。

……バカだな。

猫ちゃん。

そのまま行ったらトラックに轢かれるよ。

俺は足を速めた。限界まで速度を上げる。

派手なトラックの目の前に、黒猫が飛び出した。

俺も同時にスライディングで飛び出して、黒猫を片手ですくい上げ、そのまま走り抜ける。

トラックは急ブレーキをかけて、少しだけ後輪をドリフトさせた。

キキーツ！！

激しいタイヤの音が、空気を切り裂いた。

トラックが完全に停止すると、運転席が開いて、おじさんが怒鳴り声を上げた。

「あ……危ねえじゃねえか！バカヤロウ！！」

おじさんはトラックを降りたけど、キョロキョロと辺りを見回して俺を探した。

……俺は上からそれを見ていた。

電柱に片手でぶら下がっている。俺の片手には黒猫が固まっていた。よっぱどびっくりしたみたいだ。俺の腕の中で、ぬいぐるみのようにカチコチに固まっていた。

おじさんは不思議そうにしていたけど、まるで幽霊を見たかのような表情になって、慌ててトラックに乗り込むと走り去って行った。

俺は電柱を掴んでいる手を離れた。

ストンと地面に降り立つと、黒猫を優しく下ろしてあげる。

猫ちゃんは慌てて走って行った。

俺は住宅街の方へ消えていく黒猫に、手を振った。

バイバイ。

もう飛び出しちゃダメだよ。

そのまま大通りを通り切り、夜の街を走り続ける。

誰の目にも止まらないような、そんな速さで。

体を鍛える事は、呼吸いきをするのと同じ。

死んだ父さんがよく言っていた。

遺言も、ただ一言。

息をしる。

それだけ。

ずっと父さんを殺したいと思っていた。

いつか殺されると思っていたから。

敵だと思っていた父さんが、実は味方だったと知ったのは、死んでからだ。

父は俺を足抜け……つまり堅気にしようとしていた。

組織からの足抜けを促した。だから殺された。

交通事故に見せかけられて。

高校の時、俺をやったのと同じ手口だ。

でも、それについて何か思ったりしたことはない。

どちらかというと、ほっとしていた。

血が繋がっていないからかもしれない。

父さんは俺を拾って育てた。

いや、育てたわけじゃない。

……生かしただけだ。

普通の家庭じゃない。そう気がついたのは小学校のときだった。

普通にご飯食べてるときに天井から刃物が降ってきたりしない。

寝ているときに首を絞められて殺されかけたりしない。

お風呂のときにいきなり沈められそうになることもない。

テストでいい点を取ったら、普通は褒められる。

でもうちは逆。

殴られる。

勉強する時間があるなら息をしる。死にたいのか！

毎日、ナイフで肌を切られて、銃で脅されて、水に沈められて……

でも違うんだ。

本気で俺を殺す気なら、とっくに生きてはいない。

父さんは俺の心を鍛えようとしていた。

殺されかける事に慣れるようにしていた。

そうやってもう一人の俺が生まれた。

親子喧嘩は、いつも殺し合い。

最後にやった派手な殺し合いは、大学受験を巡ってのことだ。

俺の才能は一つじゃない！

違う！お前の取り柄は暗殺だけだ！

大学は今しかできないカムフラージュで、学生の方が自由に動ける。そう言つて父さんを説き伏せた。

……殴り伏せたというか。

俺はその時初めて、父さんに勝った。

父さんに抱き締められた思い出なんか一度もない。

それでも、人前で頭を撫でてくれた時は嬉しかった。

父さんは。

俺を愛していた。

だから突き放した。

今なら、わかるよ。

父さん……

俺は走りながら、ハルちゃんの優しい微笑を思い出した。

大事なものは、しまっておくべきなんだ。

きれいにしておきたいものは、動かさちゃいけないんだ。

傷付けたくないなら、離れておくべきなんだ。

本当に大切なものは、遠くから見なくてなくちゃいけないんだ。

……でも。

あの時ほど、近くにいられない事が悔しいと思ったことはなかった。
五年前。

初めてハルちゃんの前で人を殺した。

ストーカーって怖い。

見ず知らずの男は、いきなりハルちゃんをさらった。

当時は住んでいた場所も別々で、通っていた大学も違って。

週に何度か電話をするぐらいしか接点がなかった。

たまに偶然を装って、同じ電車に乗るくらいしかできなかった。

もし狙われている事を知っていたら、もっと早く助けられたのに。

ハルちゃんは秘密主義だから。

ストーキングに遭っていることを教えてくれなかった。

この時俺は、初めて赤い翼でよかったと思った。

組織には内緒で、自分の情報網を使った。

連絡が取れなくなって三日目。

やっと見つけ出した。

その時のハルちゃんを忘れられない。

暗い地下室で、ベッドに鎖で縛られて、目隠しされて……何度も犯

されて……首に付いていた、ひどい青アザ。きっと何度も首を絞め

られたんだ。

しかも何か薬を飲まされて、ほとんど意識がなかった。

何かの薬品の匂い。

部屋中に張られたハルちゃんの写真。

狂ったような笑い声。

すぐに助けてあげたかったけど、できなかった。

犯人を自殺に見せかけて殺した。

そのまま、ほとぼりが冷めるまでアメリカに留学……

でも日本の大学に戻ったときは、そのことをすっかり忘れていた。アメリカで何があったのか知らないけれど、そのこと自体を忘れてる。

俺は余計に心配になった。

もし困ったことがあっても、ハルちゃんは何も話してくれない。なんでも一人で解決しようとして、俺には何も見せてくれない。

別々に暮らしていて、違う大学に通っていたら、ハルちゃんに何かあったときに、気がついてやれない。

できれば大事なハルちゃんに近付きたくなかった。

きっと危険なことに巻き込んでしまうから。

けど、どうしようもなくなって家におしかけた。

あれからもう五年も経つのに。

油断してた。

まさかハルちゃんがこんなことに巻き込まれるなんて。

本人がセフレを作って遊んでいるとは知らなかったから。

だからこんなことに……

俺のせいだ。

俺が油断してたから、こんなことに。

「……………あれ。」

考え事しながら走っていたら、目的地についていた。

二時間くらい走り続けたから、結構な距離だ。

ポケットから携帯を取り出して位置を確認する。

ああ、あのマンションだ。

俺は赤いレンガの素敵なマンションを見上げた。結構な高級マンションに見える。

……へえ。

秘書ってやっぱり給料いいんだ。

こここの八階かあ。

いいところに住んでるんだなあ、サキちゃんって。

俺はマフラーで顔の半分を隠して、マンションの前を走って通り過ぎた。

うーん、やっぱりオートロックか。

となると、やっぱり裏かな。

真夜中のせいか、マンションの周辺には誰もいない。

俺は素早く周囲を確認すると、マンションの駐車場に入った。

奥の鉄格子を見ると、そこに向かって一直線に走る。助走をつけて、そのまま跳んだ。

鉄格子を手に持って、思いっきり開脚。跳び箱の要領でそこを飛び越えて、マンションの中に侵入した。

……思った通り。裏には監視カメラがない。

だって入り口がないから。

非常階段の入り口に、鉄のドアがある。

俺は白い手袋のまま、それをそうつと引いてみた。

……カギが開いている。

非常階段の中には電気が付いていた。

やっぱり。

俺は予感が的中して、ふっとため息をついた。

そのまま音を立てずに中へ侵入する。

ゆっくりと階段を上りながら、耳を済ませた。

……誰かいる。

この上に、誰かが息をひそめていた。

俺はその人物に会いに来た。

音もなく八階まで登ると、そこに座り込んでいるスーツ姿に声をかけた。

「……………こんばんは。橋本さん。」

「……！」

非常階段に響いた俺の声で、橋本主任は驚いて立ち上がった。

「な、なんつ……………！」

俺は顔を隠しているし、ニット帽を被っているので、向こうからは俺がわからないと思う。

面識もないし。

それなのに、橋本主任はガクガクに震えていた。

「だ誰だ、お前は……………！」

俺は冷静に言った。

「今野咲は、来ないよ。」

「なにっ!?!？」

「今夜はここに帰って来ない。待ち伏せしてもムダだよ。朝まで他の男と一緒に。」

橋本は俺を焦ったように指差した。

「お前っ、お前は……………! サキのなんなんだ！」

俺は笑った。

「落ち着きなよ。フラれたのは、あんただけじゃない。」

「なに……………!?!？」

「俺もそうなんだ。サキは俺とも付き合ってたんだ。あの女はね……………あんたに遊ばれてる振りして、本当は遊んでたんだよ。俺ともね……………」

「……………」

「なっ……………なんだとっ……………！」

橋本の目に異常な光が見えた。敵意むき出しの目だ。

「あの……………アバズレが……………っ!」

俺はおかしくなって笑った。

この人が、あまりにも滑稽に見えて。

「ふふっ、あんた自分がサキより上だと思っていたんだね。あんたの言う事ならなんでも聞くとおもうと思ってたんだ。おもしろかったよ？あんたが主人ヅラして、サキに命令している姿はさあ……実際に遊ばれていたのは、あんたの方だったのね。あつははは……！」

俺が肩を震わせて笑うと、橋本は真つ赤な顔でポケットから包丁を取り出した。

「貴様あつ……！」

俺は、からかつて笑った。

「あははっ……それなに？準備してたの？誰を刺す気だったの？」

橋本は興奮して怒鳴った。

「うるせえっ！」

……やっぱりそうなんだ。

会社の屋上で、橋本主任はそのまま立ち去ったけど。

あんなに異常な殺気を放ってちゃ、誰だってわかるよ。殺す気だったんだね。

サキちゃんを。

そんな度胸があるなら、今朝、彼女を助けてあげれば良かったのに。自分より強い男に逆らう度胸はなくて。

自分より弱い女の子には、どこまでも強気で。

ホントは気が弱いくせに。

プライドだけが高くて。

「あの女あ、俺をコケにしやがって！ぶっ殺してやる……！」

「……へえ、あんたにできんの？」

橋本は俺に血走った目を向けた。

「試してみるか？まずはお前からだ！」

俺はヘラヘラ笑った。

「どうぞぞ？」

「っ……！」

橋本は悔しそうにギリリと歯を食いしばると、俺に向かって突進してきた。

包丁を突き出しながら。

……バカだな。

こんなに狭い非常階段の踊り場で、そんなに勢いつけてどうするんだか。

勢い余って階段から落ちても知らないよ？

……殺意って、色がある。

白だ。

この人、ほんとに俺を殺す気なんだ。

包丁に稲妻のような白いものが、まわりついている。

電気みたいに、パチパチ光ってる。

だからすぐにわかるよ。

あんたは会社の屋上でも光ってた。

俺は逃げなかった。

ただ、立ち位置を変えた。

たったそれだけの動きで、その刃物は避けられる。

だって、あまりに遅いから。

目の前を包丁が行過ぎる。

俺は右手を左横に振りかざした。

ついでに、手の中から銀色のナイフがパチンと飛び出す。

おっと……危ない。

俺はそれを使わずに、飛び込んでくる橋本の喉を、肘で思いっきり打ち倒した。

「ぐうっつっ！」

まるで猫が潰れたような声を出して、橋本は非常階段の踊り場で倒れた。一瞬呼吸が止まったらしい。そのままのた打ち回る。

「ガハツ！ゲホゲホ……！」

橋本の持っていた包丁が、床でくるくると回転していた。

俺はその包丁を、靴で踏んで止めた。

「まったく……あんた素人なんだからさあ。どうせやるなら、手首と包丁を縛って固定しておかないと、大事な時にずれるよ？」

「き、さま……何者だ……！ゴホツ、ゲホツ……！」

俺は細いナイフを素早く袖の中へしまった。

軽く笑って、悶絶する橋本を冷たく見下ろした。

「……あんたを殺す気はない。でもついでだから、使い込みの清算でも受けてもらおうか。アテがあるんだろ？」

「なに……！なぜそれを……！！！」

「サキを強盗に見せかけて殺せば、埋め合わせできるもんな。」

「っ……！！！」

愕然とする橋本を見下して、俺は微笑んだ。

「今後サキに近付いたら殺す……脅しじゃない。本気だ。」

「っ……ひっ……！！！」

橋本の表情が、見る見るうちに青くなった。

でも立ち上がれなくて、無様に尻込みする。

「本当は今からお前を殺せば済むことだけど……まあ一回くらいはチャンスをやろよ。素人だしな。」

「う、うう……お、お前はっ……！！！」

俺はすつと目を細めた。

「ずっとサキを見てる……俺から逃げられると思うなよ。」

俺は軽い足音を立てて、一瞬で間合いを詰めた。

逃げられる前に、橋本のこめかみを目掛けて、右足を降り抜く。まるでサッカーボールを蹴るように。

ドゴオツ！

「グッ……！！！」

橋本は頭を蹴り飛ばされ、うめき声を漏らした。もちろん本気じゃない。

俺が本気で蹴つたら死なれちゃうから。
でも橋本は、そのままがつくりと弛緩した。
「…………オヤスミ。」

俺は動かなくなった男をじっと見下ろして、ため息をついた。

「はあ…………」

…………サキちゃんて、ほんとに男運が悪いんだなあ。

パチスロ覚せい剤の次は、ほかの人と結婚してる勘違いストーカー。
しかも会社のお金を使い込んでいた。

きつと調べられたら警察にバレちゃうだろうね。

そして…………

その次も。

俺は、クツと目を細めた。

暗殺者アサシンとはね…………

しかも、サキちゃんの事なんかどうでもいいと思っているようなヤツだ。

ただ、呼吸いきのついでだから、助けただけ。

さつき助けた、あの黒猫と同じ程度だよ。

…………ごめんね。

本当はどうでもいいんだ。

君のことも。

俺は気を失っている橋本をそのままにして、元の通りのルートで外に出た。

一番近くの公衆電話から、非常ボタンを押して警察へ電話。
電話の向こうは冷静な男の人が出た。

「警察です、事件ですか、事故ですか？」

俺は自分の中では一番高い声を出した。

「あたし、この近くのマンションに住んでるんですけどお、変な男の人が刃物持って、大声で叫んでるんですう。怖くって眠れないわあ。なんとかしてよお。」

「え、どこのマンションですか？住所と、あなたのお名前を教えてください。」

「……」

俺はそのまま何も言わずに受話器を置いて電話を切った。

最近の警察は、ちゃんと発信元をわかっている。

俺は電話ボックスを飛び出して、真夜中の街を走った。

急いでサキちゃんが眠るホテルへ戻る。

誰かに、見られない内に。

俺は闇の中を走りながら、今度は最近の事を思い出していた。

あの時……ハルちゃんが夜中に電話をくれた時。

あんな真夜中に、ハルちゃんから電話かかってきたのは初めてだったのに。

何かあったに違いないのに。

俺はどうしても電話に出られなかった。

暗いビルの中。

横たわる死体。

足元まで飛び散った黒い血。

俺の左手には、小さな拳銃。

俺の目は、冷たい殺人者の瞳。

別に、その人に恨みがあったわけじゃない。

初対面だ。

どうしても、新鮮な死体が二つ、必要だった。

Rのために。

……でもそれはすべて、夢の中だ。

現実じゃない。

だって全部、白黒に見えた。

血の色も。

その人も。

周り中、すべてに色がない。

でも。

ハルちゃんの声を聞いたら、現実に見えちゃうかもしれない。

そう思ったら……恐くて。

電話に出られなかった。

殺しは、食事と同じ。

俺は誰かの命を食べて生きてる。
生まれた時からそうだった。
でもそれって。

みんなもきつと、一緒だよね。
牛や豚を殺して、その肉を食べてる。
それと同じだよね。

……ハルちゃん。

あの屋敷で、何があったの？
監視カメラが多すぎて、さすがの俺でも入れなかった。
Rはハルちゃんに何か言った？
とても心配だよ。

Cに近付くなんて。
だからずっと見てたよ。

山の中で雪さんに抱きついたのも。
その後のキスも。
平手打ちも。

あの時、雪さんは殴られたのは二回目だって言ってたけど。
一回目はいつなの？
ハルちゃん……

その時見て、わかったよ。
本当は、雪さんが好きなんだ。
だからあんなに雪さんを頼ったんだ。

だから俺も、雪さんは許すよ。
でも。

山の中でハルちゃんを撃つた男は許さなかった。
ハルちゃんの前で人を殺したのは、二度目だよ。

本物の八子針に、100倍濃縮の八子毒を塗っただけ。後で抜く必要ないしね。

ハルちゃんが撃たれたと思ったら、心臓が止まった。

無事だとわかったら、気が抜けて木から落ちちゃった。

珍しいんだよ？

俺が物音を立ててるなんてさ。

警視庁の帰りに、地下鉄の駅のホームでなんて言ったの？

いつもならバツチリ聞こえるのに、手を繋いでいたから本当に聞こえなかった。

雑音が多すぎて。

あの時の俺は、現実にいたから。

本当は聞き返したかったけど。

ハルちゃんは諦めたような顔してたから、何も言えなかった。

誰がやったの？

手を繋いだ時に見たよ。

手首にくつきりアザが残ってたね。

誰がやったの？

まさか雪さんじゃないよね？

だったら、あんな心配そうな顔しないよね。

……大事なハルちゃんを傷付ける奴は、誰であろうと許さない。

だから、あの外人さんも殺そうと思ったけど。

ハルちゃんを守ってくれたから、許してあげる。

でも本当に許せないのは。

こだよ。

必ず殺すよ。

大事なハルちゃんを巻き込んだ。

でも今は組織の目があるからね。慎重にやるつもり。

必ず殺すよ。

いつか……必ずね。

07・悪夢の続きは。

地面は泥だらけだ。

周りは墓地で、石が並んでいる。

真っ暗だ。

俺は恐くなって走った。でもうまく走れない。泥に足が取られて。ぜんぜん前に進めない。それでも後ろから追ってくる。

恐くて、走った。

恐くて、汗が出る。

恐くて、涙が出る。

それでも進めなくて。

ああ、いやだっ………！

夢だ。

また夢だ。

夢なのに、どうしてこんなにリアルなんだ………！

来る。

「ああああっ！いやだああああっ！」

叫ぼうとした瞬間。

喉に声が張り付いた。

足を掴まれる。

地面に這い出した白骨の手に掴まれて。

引きずり込まれる。

足も。腕も。首も。顎も。

白くて冷たい骨が、俺の体を引きずり込む。

真っ黒な泥の中に沈められる。

助けて………！

誰か………！

神様、早く………！

俺の神様！

ハルちゃん！！

真っ暗な空から光が差し込んで。

きれいな手が、俺に向かって伸ばされて。

ああ……！！

来てくれたんだね……！！

俺はその手を掴もうとしたけど。

「っ！？」

俺は初めて、その人の顔を見た。

「は、ハルちゃん……！！？」

ハルちゃんだった。

きれいなその人は、俺を見て、今にも泣き出しそうな表情だった。それなのに必死に俺に手を伸ばして。

俺はそれを見て。

絶望した。

やっぱり。

そうだったんだ。

この手は、ハルちゃんだったんだ。

じゃあ、俺は……！！

俺たちの手が、触れそうになった時。

俺はその手を。

振り払った。

落ちていく。

真っ暗なところへ。

驚いているハルちゃんをそのままに。

俺は急速に闇と泥の中に引き込まれていった。
真っ黒な闇で。

もう何も見えない。

俺は怖くて。

叫べなくて。

終わりだ。

と、思った。

でも……どこかで。

ほっとしていた。

満足だった。

……連れて行けないよ。

こんな真っ暗で、怖いところに。

ハルちゃんを汚せないよ。

どうかハルちゃんだけは。

きれいなままで、そこにいて。

光差す高みから、落ちていく俺を見ていて。

さよなら。

一番好きで、一番愛してる人。

さようなら。

一番近くて、一番遠い人

その瞬間。

落ちていく俺の右腕を、誰かが掴んだ。

ものすごい力で、ぐんぐん上へ引つ張られる。

俺は一気に、真っ暗な泥の中から引き抜かれた。

「！！！」

びっくりして目を開くと。

目に飛び込んできたのは、ハルちゃんの鮮やかな顔。

「落ちるぞ、友宏。」

ハルちゃんは思いのほか、冷静な声で言った。

「え……」

ハルちゃんは片手で俺の腕を掴んでいた。

俺は震えた声で言った。

「は、ハル……？」

俺はリビングのソファから滑り落ちそうになっていた。上半身がソファからずれている。ハルちゃんは呆れたように言った。

「まったく……土曜日だからって朝からソファで寝やがって。掃除する方の身にもなれよ。」

「ハルちゃ……」

俺は呆然として、がくがくと震える身体で起き上がった。

俺はスーツでも仕事着でもなかった。

ただの部屋着だった。

高校の時の、青いジャージ。

ああ……そうだった。

家に帰ってきてきて着替えて、朝からソファでうたた寝を……
鮮やかなハルちゃんは俺を覗き込んだ。

「ん……？どうした？友宏。」

「ハルちゃあああん！恐かったよおおー！！！」

俺は我慢できなくて、がばあっ！！とハルちゃんに抱き付いた。

「うわあぁっ！！なんだ！？」

ハルちゃんは慌てて言ったけど。

俺は構わず、ぎゅーっと強く抱きついた。

「なななんだよ！急に！」

「怖い夢見たよおおー！！！」

「子供か、お前は！」

「うえええーっ！」

俺が泣きながら抱きついていると、ハルちゃんはヨシヨシと背中を撫でてくれた。

「……まったく、どんな夢見たんだ？言ってみる。」

「ううっ……転んで泥まみれになる夢……」

ハルちゃんは呆れたように言った。

「またそれかよ、もう子供じゃないんだぞ。」

「だって、怖かったんだああー！」

「ああ、わかったわかった。」

ハルちゃんはポンポンと背中を軽く叩いてくれた。

「ちゃんと布団をかけないから、怖い夢を見るんだぞ？」

「ううう……そうなの？」

「ああ、体温が低下すると夢見が悪くなる。実証されているんだ。

夜もちゃんと布団をかけるよ？本当は、うたた寝なんか論外なんだぞ？」

「でも怖かったよおおー……！！！」

ハルちゃんは呆れたように笑った。

「はいはい。もう大丈夫だ、ここは現実だからな。」

「……！」

俺は、あつたかいハルちゃんに抱きついたまま、呆然として。

……ふっと目を閉じた。

「うん……」

END……

07・悪夢の続きは。(後書き)

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございました。
これで友宏編は終了です。

友宏のことがよくわからない方へ。

表現力が足らなくて申し訳ないので、説明を……

友宏は、春人のことをバイだと思っています。

しかも、春人の演技が完璧なので、自分を想っていた事を知りませ
ん。

そして、大事な春人になるべく近付きたくなかったので、今までは
プライベートを探るようなことはしていません。ただし、
異変があれば気付けるように一緒に住んでいます。

春人の方も……

最初は確かに恋愛感情だった友宏への想いは、雪成の登場によって
少しずつズレていきます。自分でも気付かない内に、そっと……恋
愛感情から、ただの愛情へ。

互いを聖域にしていく二人。

そこに、どうやって雪成が入っていくか……応援、よろしく願
います。

> (| |) < ページ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5722/>

春に降る雪 ~ 杉田友宏の章 ~

2010年10月9日07時18分発行